[illegible]全集　十三

[illegible]書

ケ5
68
34

早稲田大學圖書

# 信玄全集末書上巻之十三　備

一　座備立備手与手分并配人数積り七ケ條の事
二　御旗本座備の陣法四ケ條乃事
三　座備圖
四　五十騎の備雑兵迄乃定二十二ケ條并事
五　五十騎備立圖并備所積り人数積り乃事
六　先手旗本後備小荷駄迄想備の事
七　同想備圖
八　一備の人数知り積り相備一二の手配の事
九　一れ先手の士大将旗本備立圖

十　二の丸士大将旗本備立の図
十一　武田信玄旗本備図
十二　信玄旗本先番之備形
十三　同旗本先番之備臨合戦之図
十四　七千五百の備立図五ツ
十五　奇正并三才備
十六　小連子（ツヅラ子）之備付八形人形之備
十七　いろこ備
十八　待身方備
十九　車懸
二十　長蛇
異本
一　方円八陣座備
二　方円座備図
三　方圓單法九ヶ条の事
四　三段の座備乃事
五　五段座備の図
六　三段座備外法三ヶ条の事
異本
備要
一　長蛇の備乃事
二　円形乃備の事

三　鋒矢の備の事
四　彎月形備の事
五　鴈行の備の事
六　衡軛形備の事付くるり
七　常蛇之陣之事
八　回し備の事
九　敵回し備敵を破る備之事
十　両二裏備の事
十一　車る敵を治る備之事
十二　車懸の事
十三　車懸りを破る備の事
十四　備をそなへんでくりかく分兆生の事
十五　奇正之事

信玄全集末書上巻之十三　備

○一　座備立備を組分て配人数積七千余の

一　近習二百八十　又騎は六番にまはるなり一番に大将

一騎小姓一騎　武者奉行一騎旗奉行二騎後奉行二

騎合而七騎与合て惣騎ゟ数又十と都合一番に五十

七騎也六番共にはなれ組勝負ともに所々一番の

二の勝は二番衆三番の二ツ勝は四番衆五番は一

勝六番衆と立配されは六隊と云合戦なり

大合戦には両番衆と其次の番衆は勝利の時に

不動定なり

二

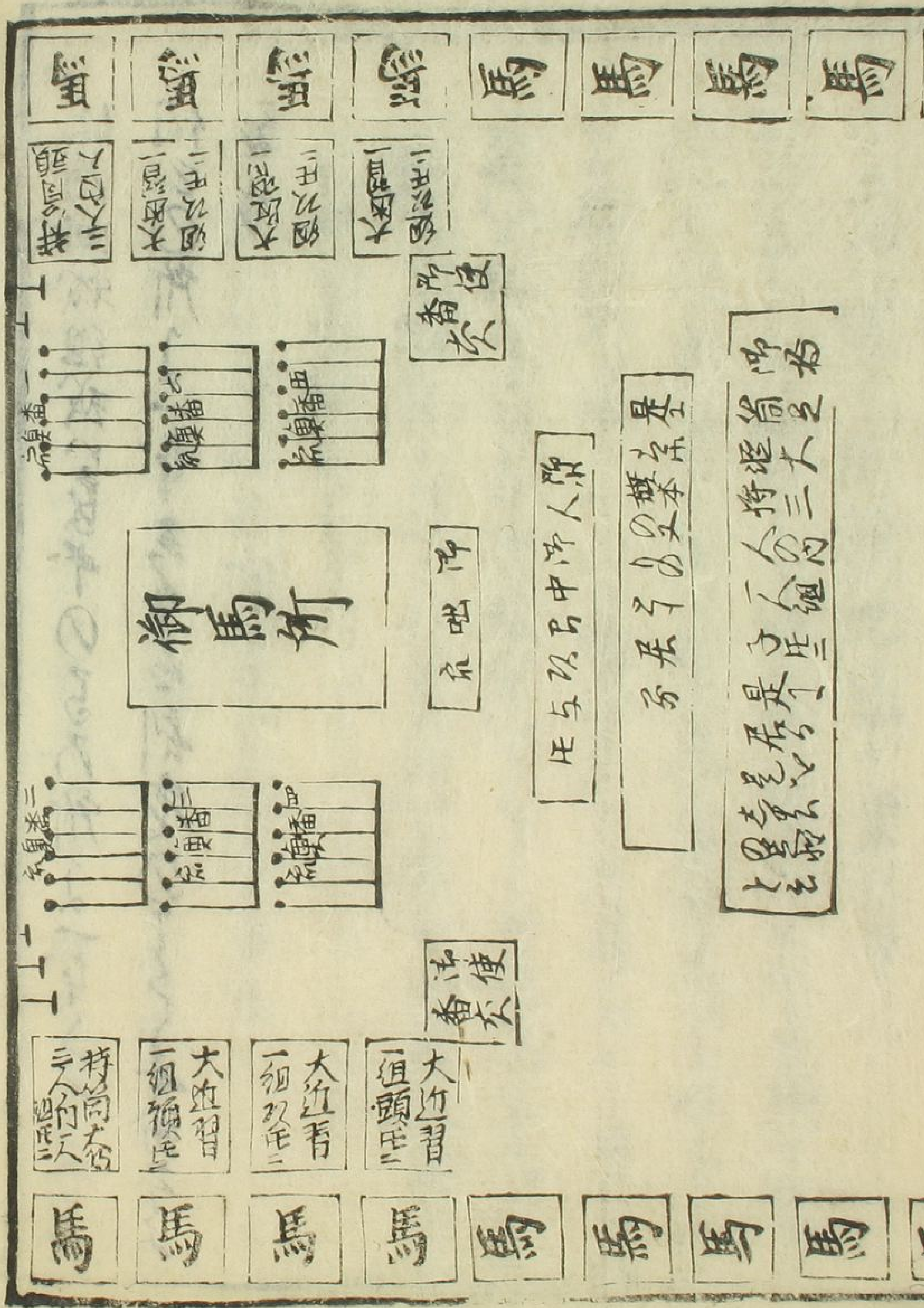
奥近習三十騎是も六番にて分形共に一番六人

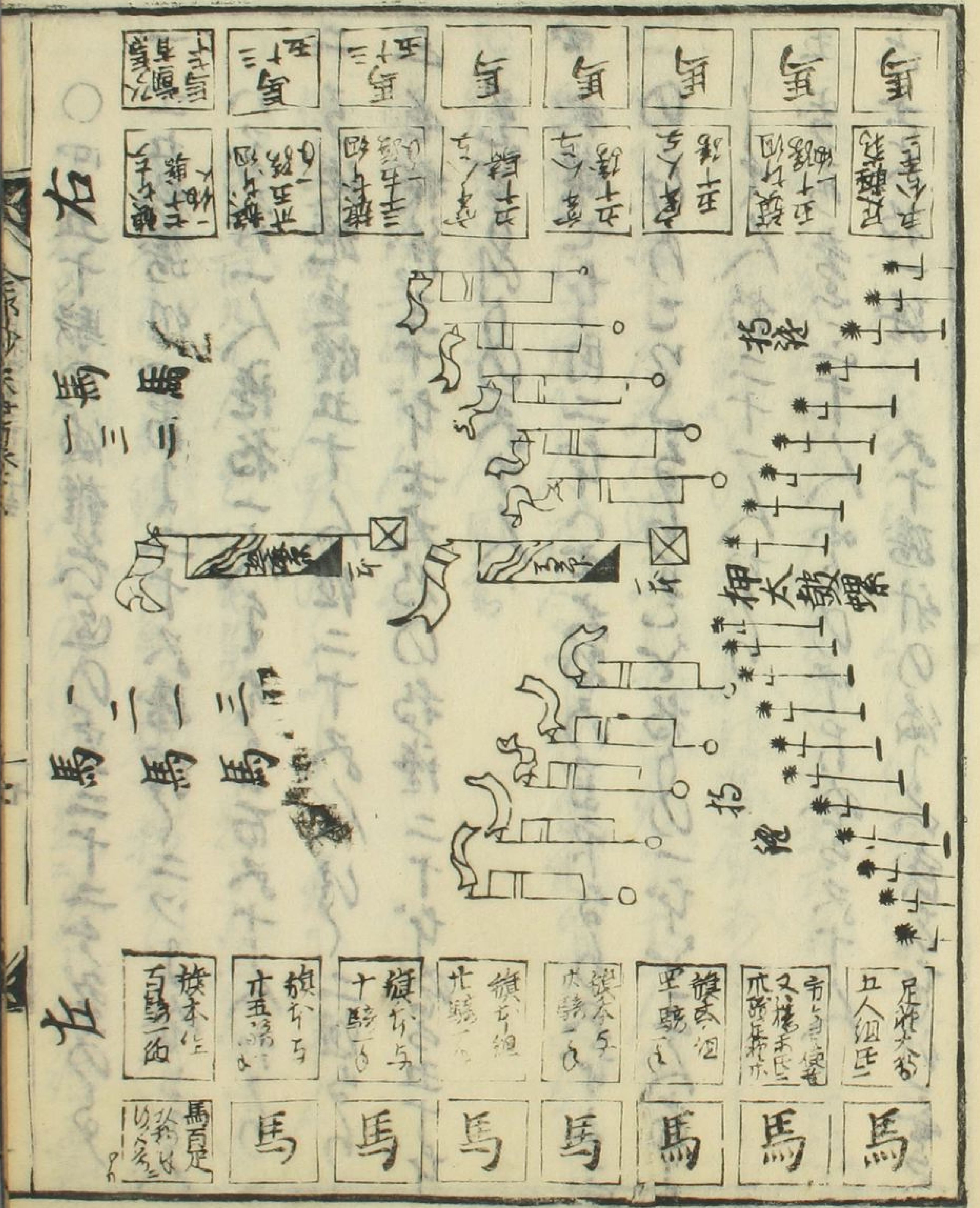
はくなり勝負の務やうハ大を習ふたるし
三 足軽大将廿二組にて合之拍子を内三人御
持筒也内十人ハ小旗持の先鉄炮にて旗持の六十
人宛と足と云ふしめハ足軽大将一騎に歩足軽
十人ほくおづけらるく役にハ二十人つゝなり但勝
負の時も陳丸の外も左右隔番た御持筒とも
に同心二なり組弓足軽も二十人の内四張又張る
足弱る九人ハ前後勝後或ハ国境の番に当り
居或ハ先手の士大将の相組などに引分なり
四 諸足軽の手組の合やうハ右此足軽大将など郎とも
百貫に長柄鑓三十本ほどなり千貫にハ二十本

あり弓鉄炮足軽の役に使ふ極二三千貫の足軽
大将に六千貫分ハ長柄鑓を持を二千貫分ハ鉄炮
足軽なり但六十人の内二十は弓足軽とするハ此
公家永禄四年以後ハ百二十人の足軽ハ弦寄人二
百十騎の三組ハ日ごとに役付られ奉公は奥退
五 物右六番ハ付り
使番十二人
六 御ふり前百二十人も番目と此番前ハ不動
七 御旗机等の前二三人足ハちら気御親類衆
後或ハ高家衆并に将役付合戦あるしまき
但又前へ沈御大将御自身先後皆伝人分

の柄当りよくてハ右叶事なり
○二御旗并座位の作法四ヶ条あり
一 足ハなるより切りて位の作法なり先は位を立る
時ハ二の足を下へなして右の足は右よりも地へ下ろし左
に居なし低くして位の見を見積りて位立置
畏を敵の方へ御旗并をたてしめ諸位備の後に座
位なり敵急にかゝれハ又位を取りて即合戦すべ
こゝろもちよし
二 御直家の前右御旗にて取立なり
三 同心なる者ハ右の戦のなる所小旗立なるべし
四 諸位の士大将何程なる事二本つゝ指立るなれハ座
位乃間戦組戦ハ家中のある所に一本つゝ立て又
本陣の所に一本立るなり割符のことくに余旗あるべ
あり

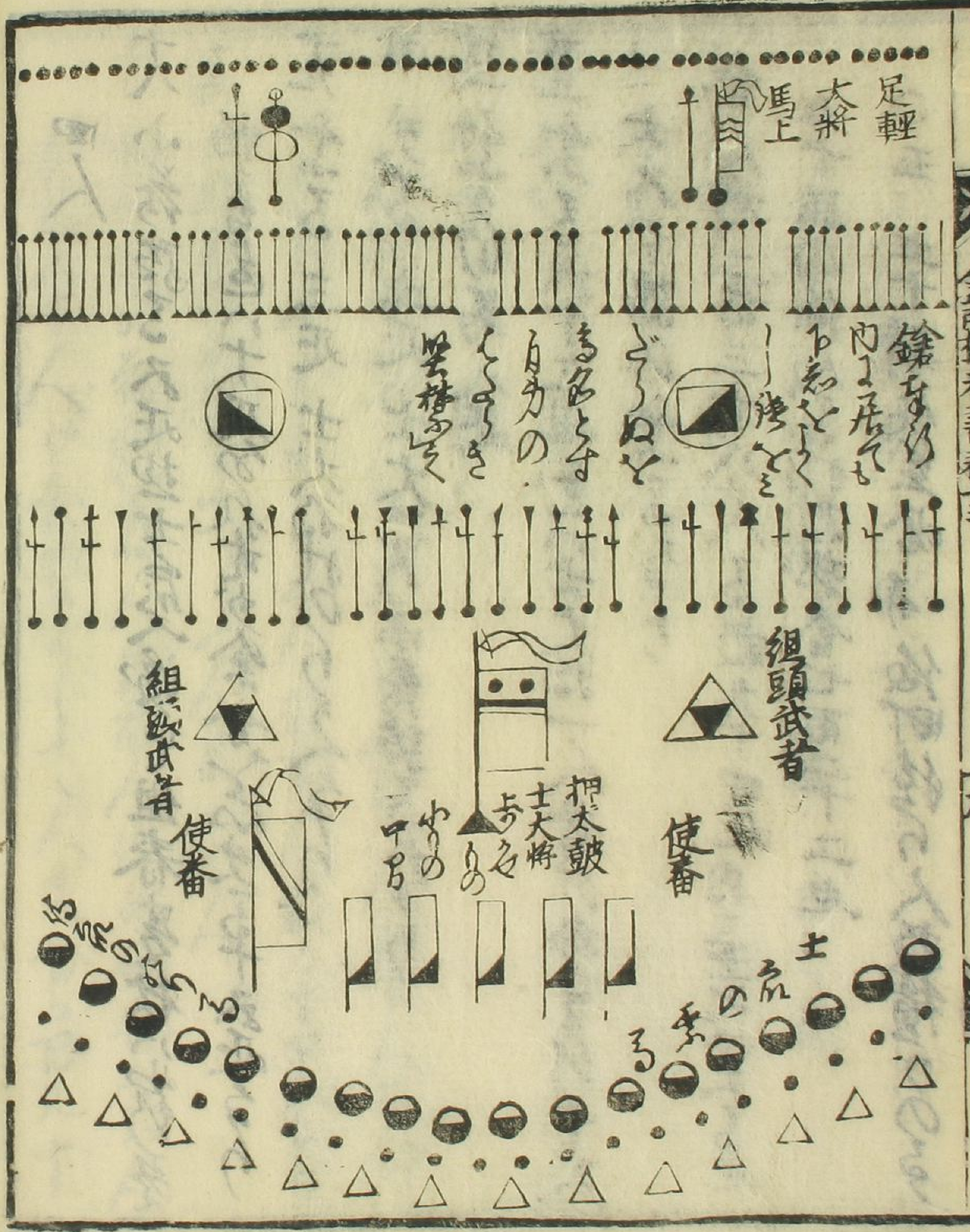
## ○三 座備圖



○四五十騎の備雑兵迄の定二十二ヶ条のうち
一 士五拾騎組一番より二十又騎迄二ツに分る其人
ハ馬乗一人徒歩一人主共百又十人なり
二 弓鉄炮足軽五十人組二十又人迄二組なり
三 長柄鑓三十本士大将の持鑓二十本合五十本
足ともりの又十人
四 総旗七本内二本ハ士大将乃馬印なり又本ハ三
のうけのこゝろなり足ともりの一本を三人宛に
して人数二十一人なり
五 歩行者二十人ふりの中与合て又十人
六 士大将一騎　又千騎計の備ハ武者奉行壱
師士大将武者奉行なり組百騎を二備に作
時ハ武者奉行一人あつて士大将九二二騎を
ひく人数を持ちたれば勝負あやうし
七 組頭二騎下人又人連して主共に十二人なり
八 足軽大将二騎下人又人ふして主共に十二人合に
九 鉄炮奉行二騎下人同前
十 旗奉行二騎下人同前
十一 使武者四騎下人四人従てふして主共に二十人
合三百九十人 是ハ皆具足とおもひてなり歩
武者ハ甲冑鎧具足ハ様り持なりるひとく
鐙持足軽るとい八年の役具足るを 組頭

又ハ旗本騎士のべ〳〵へ分をさく多し
右の外小荷駄 并 宗徒侍へ馬之騎
十二 臺所人　弐人
十三 納戸　壱人
十四 小姓　三人
十五 右筆　弐人
右何も家来ケ廻るなり合せて八人右下人二人つゝ
召して三十二人　都合人数二十四人なり
十六 士大将の臺所ふつかふ人　廿人
十七 惣士卒の小荷駄を持人　廿百人　但是ハ御春迄ハ八人
又百又十人ぞ余党を以て人　都合二百九十
四人
十八 小荷駄ハ又廿疋　惣士卒へ渡して但春夏秋ハ一駄を
御春迄ハ八十疋ありて外に余分を以て廿又疋なり
十九 家来　三疋　士大将乗替の引馬なり
廿 同　五疋　士大将の小荷駄なり
廿一 家来の引馬　八疋
廿二 家来六十三疋　是ハ士大将一人者頭旗本十二人
士又十騎の家来なり
合人数二百三十八人　馬数九十四疋　内三十疋ハ乗馬也
五十騎の侍人馬の数都合七百二十二也
○五　五十騎侍並番　并　侍町騎り人数積りのこと




一 右の備ハ者頭役人を除て又十騎の備なり一備
までも合戦をする時ハ必勢ハ切り立得道具残
らずでかりしき士大将者役をかゝりなる上ハ
是ハ又重ねよき也

二 なる上又十騎あとこと武てうりお肉後二てうつまさ
て給ありわとくり備へ一てう

三 五十騎とハ三百の備といふなり右のことく又積り
てハ若菜人足を除て三百九十人なれ共是を二三
百の備といふ

四 百騎とハ又百の備といふなり又十騎の備のことくに
積りても七百八十人なれ共を夕分れ人數積りを

なさせされハ我国にハほとあらうへ永陳をとり
くつ故に也
○六 先手旗ひらき候小荷駄迄趣候のる、
一 一の先七手あり但一手にハ六人七人十人にても
一三ハ手くと為分合一手を六十二騎又十騎四十騎
或又騎三十騎の手にも大坂小坂はかまへ左の端れ先
手の大将ハ老功を用ゐて中ほハ右の先へ手あり
先陣他所へ一手もちて勢の時ハ三手の内一手を
必旗ひのごとく見てハ送足并近侍あり
二 二の先七手一の手の三所々或ハ先手にて候数多勢と
勢ハ又町も続きり見ハ何も先手の初合戦の是

定押太鼓をたちめ揆への勝負をさらん事あ
に二の手にハ桐候なく但騎馬おりくハよう
なを候ハ又二の手 にも六十二騎の強ミ候多
又騎馬の有餘も十騎二十騎三十騎四十騎にても
定て出る備の時ハ候満座くハ勝にもとる時
の変に随て候を立トりと名付ら
三 前後七手外内に己一の大身我印の士大将取候所
とするなり
四 右の勝候六手見も候所ありて六手を以て一一
の合戦取付るなり但一手はトリ候なり
又左勝候六手の内に候所あり勝負ハ右六手の

しし

六 後段九ヶ所内後段あり是皆前後あり後あり組
後勝後右勝後と後段九ヶ所と三ツと合て二十一段
合一ヶ所又十勝二十勝まても不審

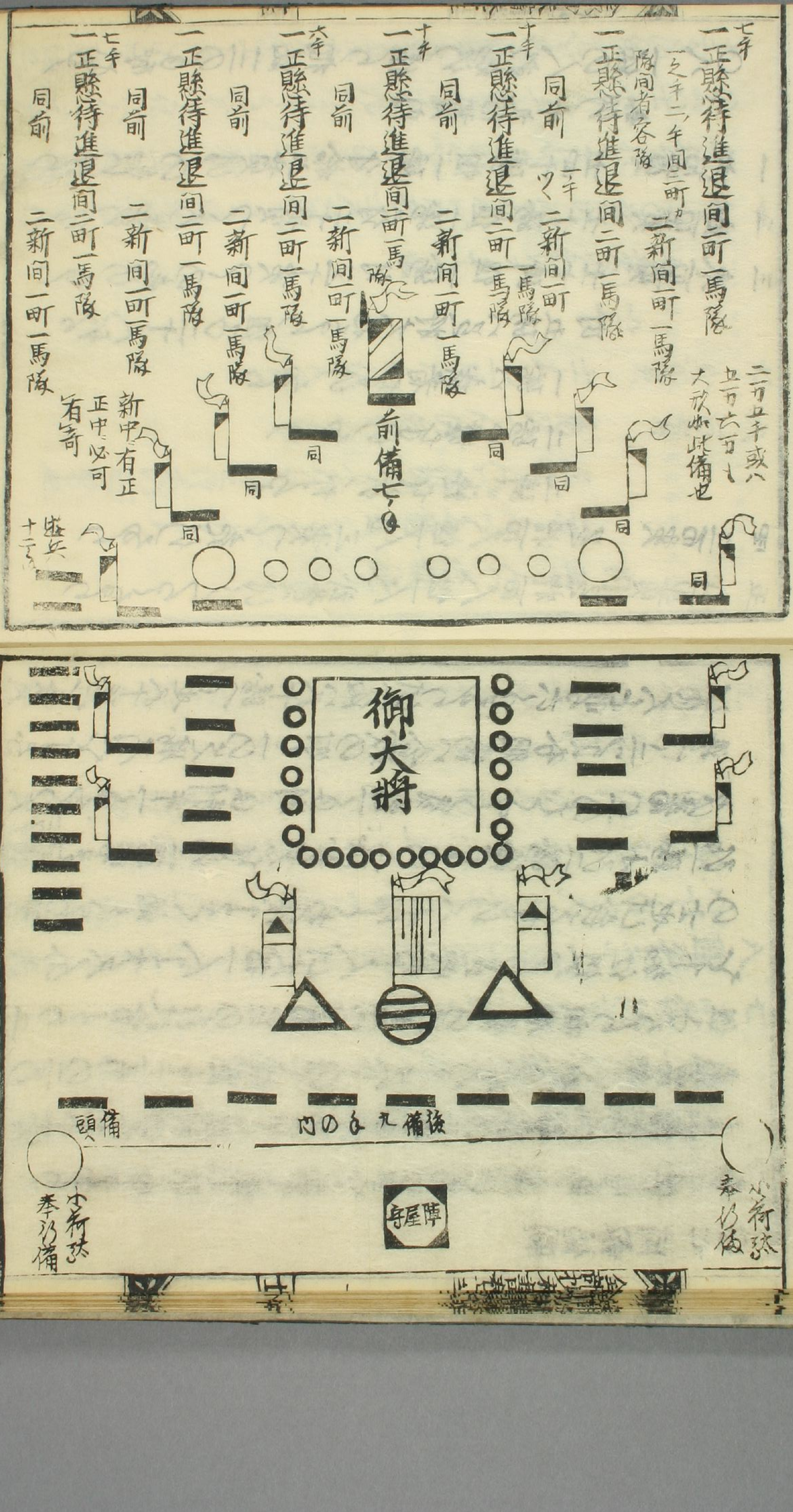
七 小前語申候二段左右名番

八 勝負二十一ヶ所此後段必我所と云てむかふ所ヶ所
八十ヶ所十又ヶ所二十ヶ所も多く移りし此後段段合敵
敵後段を奪て捨或いは我敵を抱分て八番
目まて後方前手居かけ是は是け抑て後段
皆の後図と申すも前後あるし

九 旗本組二千四ヶ所右者は後段女士大将あり組

此内大将明六ヶ所あり此一後ハ又十勝つて也又十勝と又又
勝つて二ツまて合羽番ハ合戦の時も一の先勝負とするなり
又番ハ二のたつて前是一ヶ所別ヶ所別申一ヶ所あり大
段一勝小段一勝捨申候二勝我前申候一勝皆是瞑想
の士也此我前申候ハ小段とお勝すまく後とくらあり
と下知仕候あり是惣六十人此大将一人まて又又人つの
組子あり初勝負の後背ハ一番方のうしろ方より二
番方扣く敵の右方へ入りて後前まて二番の二万
も黒番方又番方の二ヶ所六番方も勝利の拍子ハ不審
あり但前番と次の番ハ軍を指て味方をひかゆるなり

○七 同惣後圖


二万五千或八
五万六万も
大軍此備也
七千
一正懸待進退間二町一馬隊
二新間一町一馬隊
同前
二新間一町一馬隊
十千
一正懸待進退間二町一馬隊
同前
二新間一町一馬隊
十千
一正懸待進退間二町一馬隊
同前
二新間一町一馬隊
六千
一正懸待進退間二町一馬隊
同前
二新間一町一馬隊
一正懸待進退間二町一馬隊
同前
二新間一町一馬隊
七千
一正懸待進退間二町一馬隊
同前
二新間一町一馬隊
新中有正
正中必有奇
前備七備
同
同
同
同
同
同
御大將
陣屋
後備
備頭
小荷駄奉行備
小荷駄奉行備

○八 一備の人數知行積り相備一二の手配なる〳〵

知行千九百貫内

一 六百貫 士四十騎但一騎ニ付拾五貫積りの知行なり

二 貳百貫 士十騎但一騎ニ付二十貫つゝの知行なり

三 參百貫 士十騎但一騎ニ付三十貫つゝの知行なり

内五騎ハ足輕大將なり組子二十人預る

一騎ハ武者奉行なり

二騎ハ旗奉行なり

二騎ハ使番なり

四 三百貫 足輕百人但一人ニ三貫つゝ宛行なり

五 貳百貫 足輕百人但一人ニ貳貫積りなり

内五十人ハ長柄鑓の外

二十人ハ小旗或ハ馬印を持なり

三十人ハ遊擊として具持足輕等の闕カケ替也

六 百貫 番頭一人の知行なり

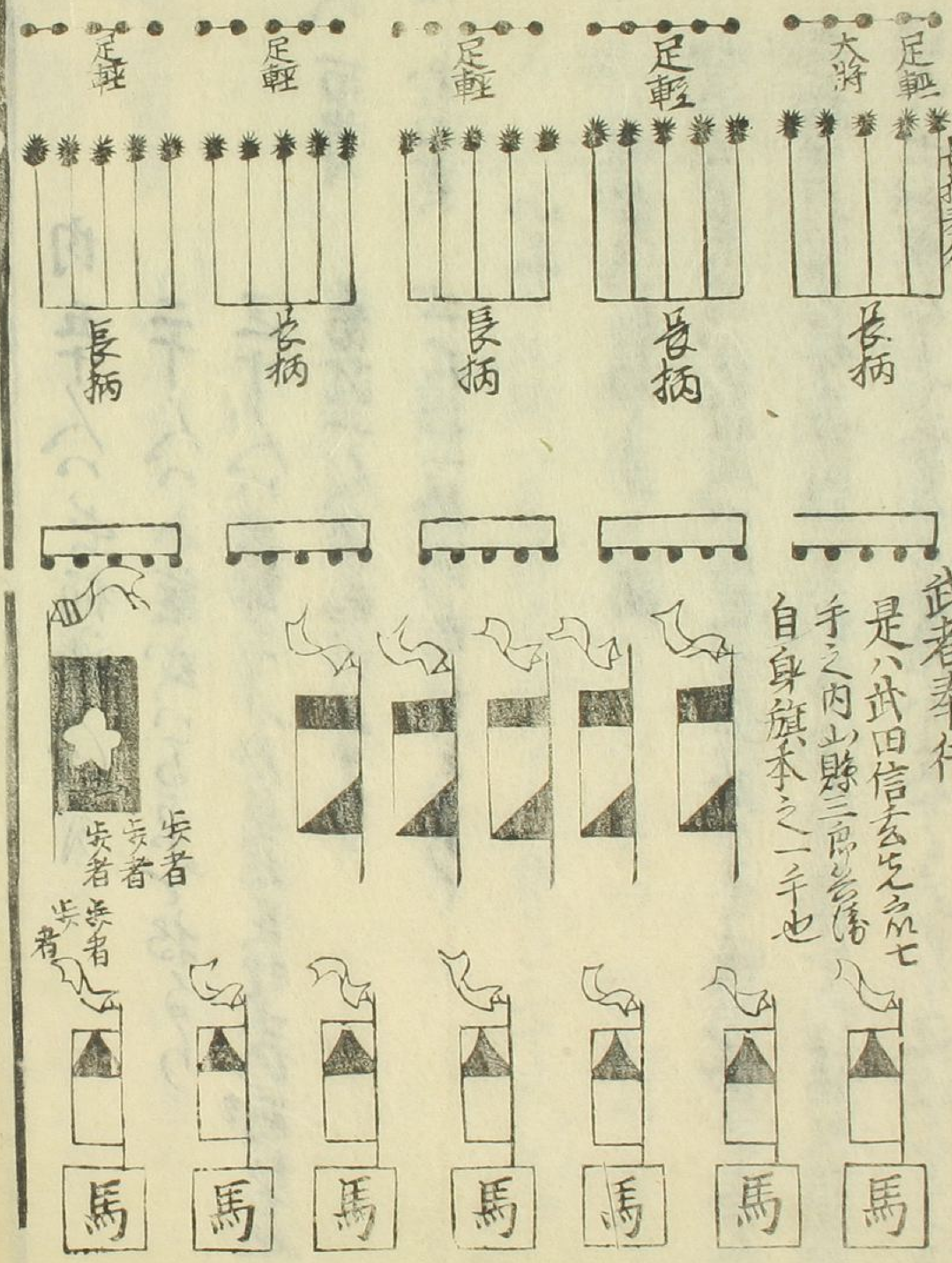
七 貳百貫 士大將一騎の知行なり

以上

千貫の知行にて一備

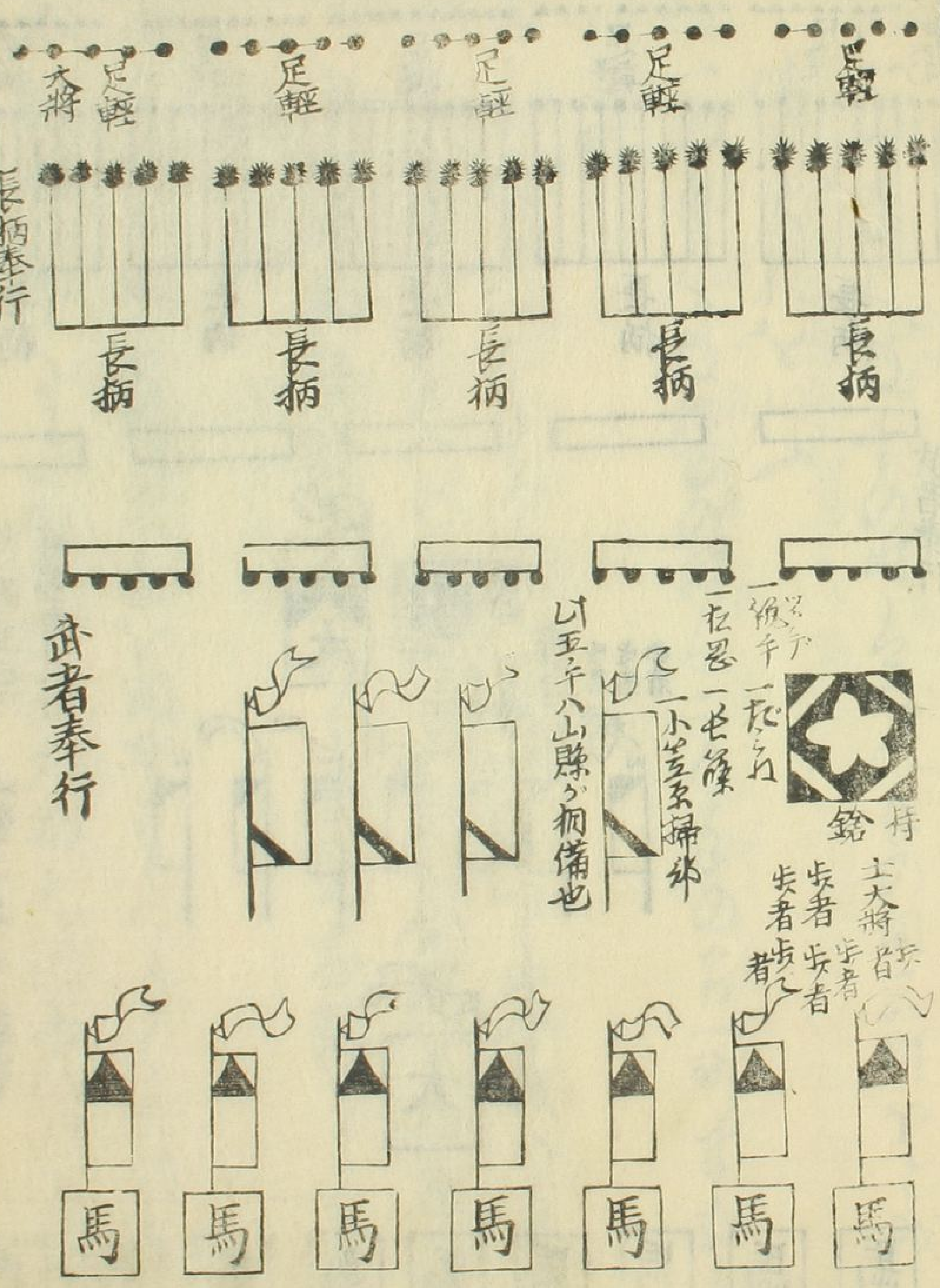
一 知行千貫内にて人ハ大形士又ハ六騎にて鉄炮足輕者十余人ハ抱持れハそれにて士同心を預ケ候人ハ六十二騎にて一備也但戰國の時ハ士ニ貳騎にて歩兵のみ足輕ハ五十にて従役兵にて云十二手の備ゑ足を備ニ備騎なの五五六人大人ハ小と云はも八四十騎一備也

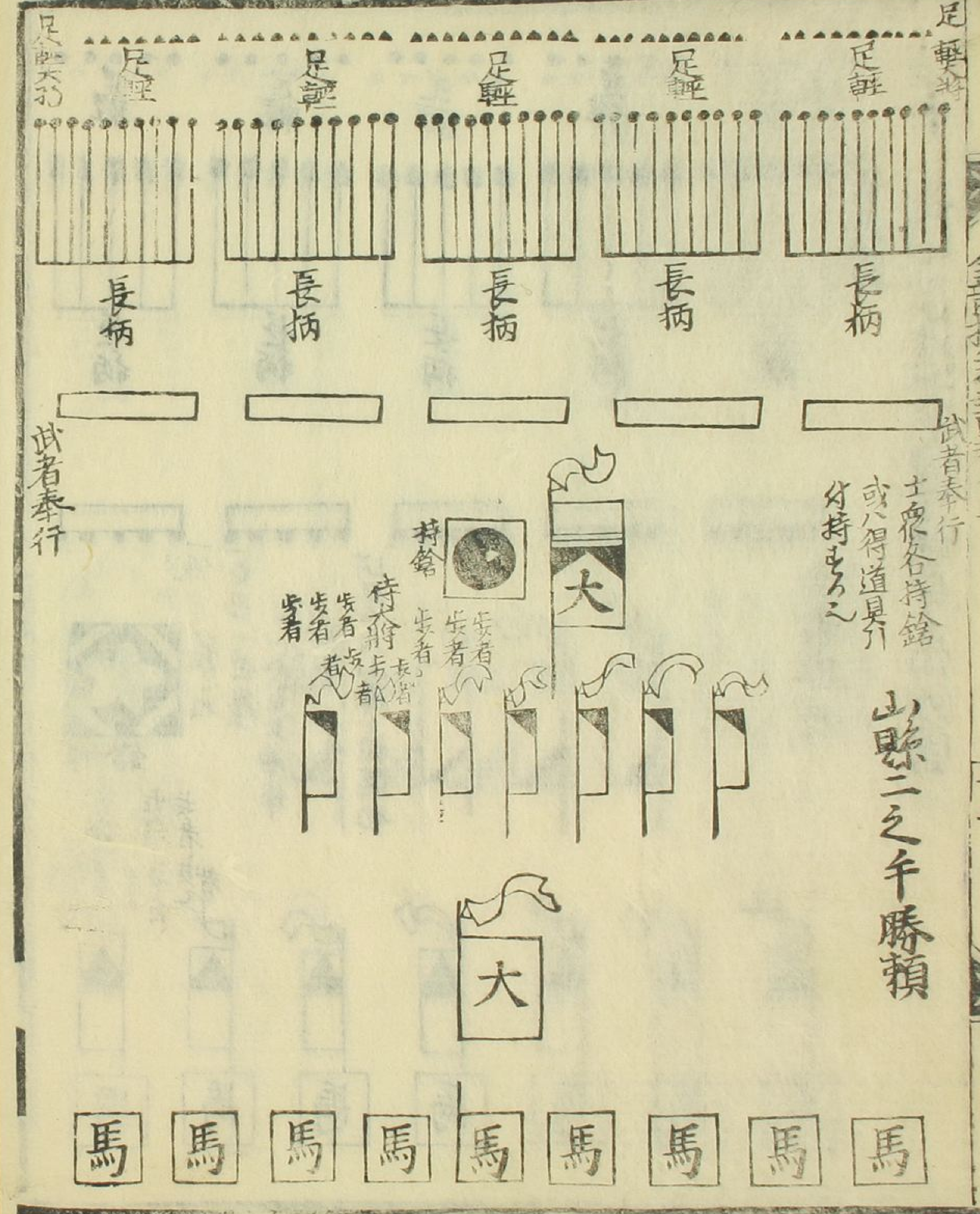
○九 一の先手の士大将旗本備立図




是ハ武田信玄先之備七手之内山縣三郎兵衛自身旗本之一手也

○十 二の手の士大将旗本備の図






一二の手人数千の時ハ二九手の間三町ほど我の
備とあれとしよ
二一の手人数五百の時ハ二乃手の間一町ほどに
二町
三二ノ手数多ハ九手ありて一組二手ニて四合戦八手也
九手目の一手ハ下乃備と定て合戦を指図乃敵
まれ備後備ニ敵ニかゝる員大敵ニなく進
退あり
四右の手備の頭の下知を聞てよろしく士の手也
又敵国へ動くまゝ先手の士大将その手の中へ乃先を定
く大合戦ニハ旗本右の方乃先ハ左ハ国乃先

と定て人数をさしむる

六 道具所やうちに治国よ出る者切りめぐりて兵具の名を武勇ハ勝負わゆく大將よよ手勢兀人多し戦国乃時ハ仕節この陣よまて出る者多し故よ兵具の間ちらし

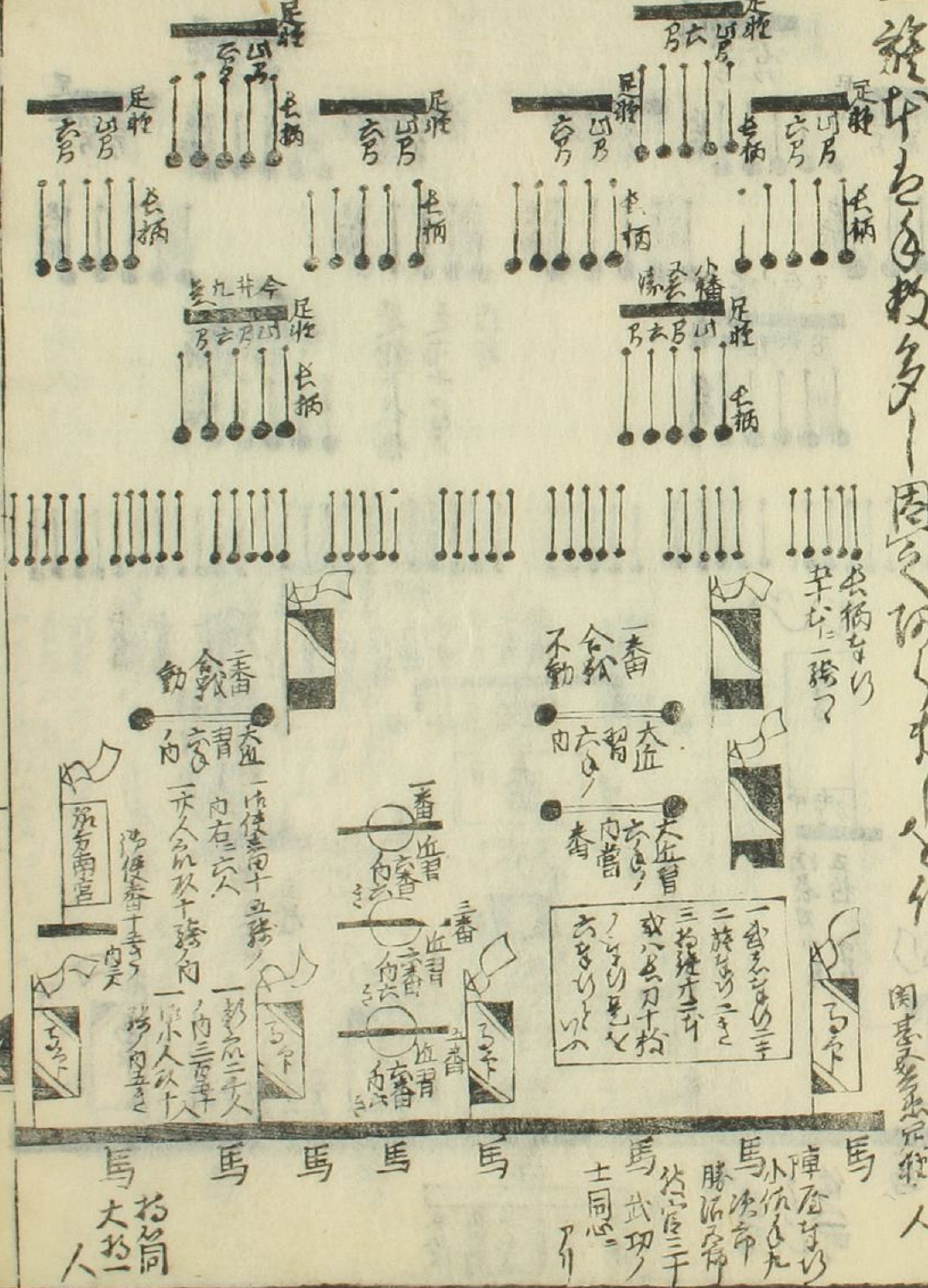
七 一乃手よも三兀ありけも金鼓よよく相図て兀の勝負兀者頭召とゆくむこれ軍の大要あり

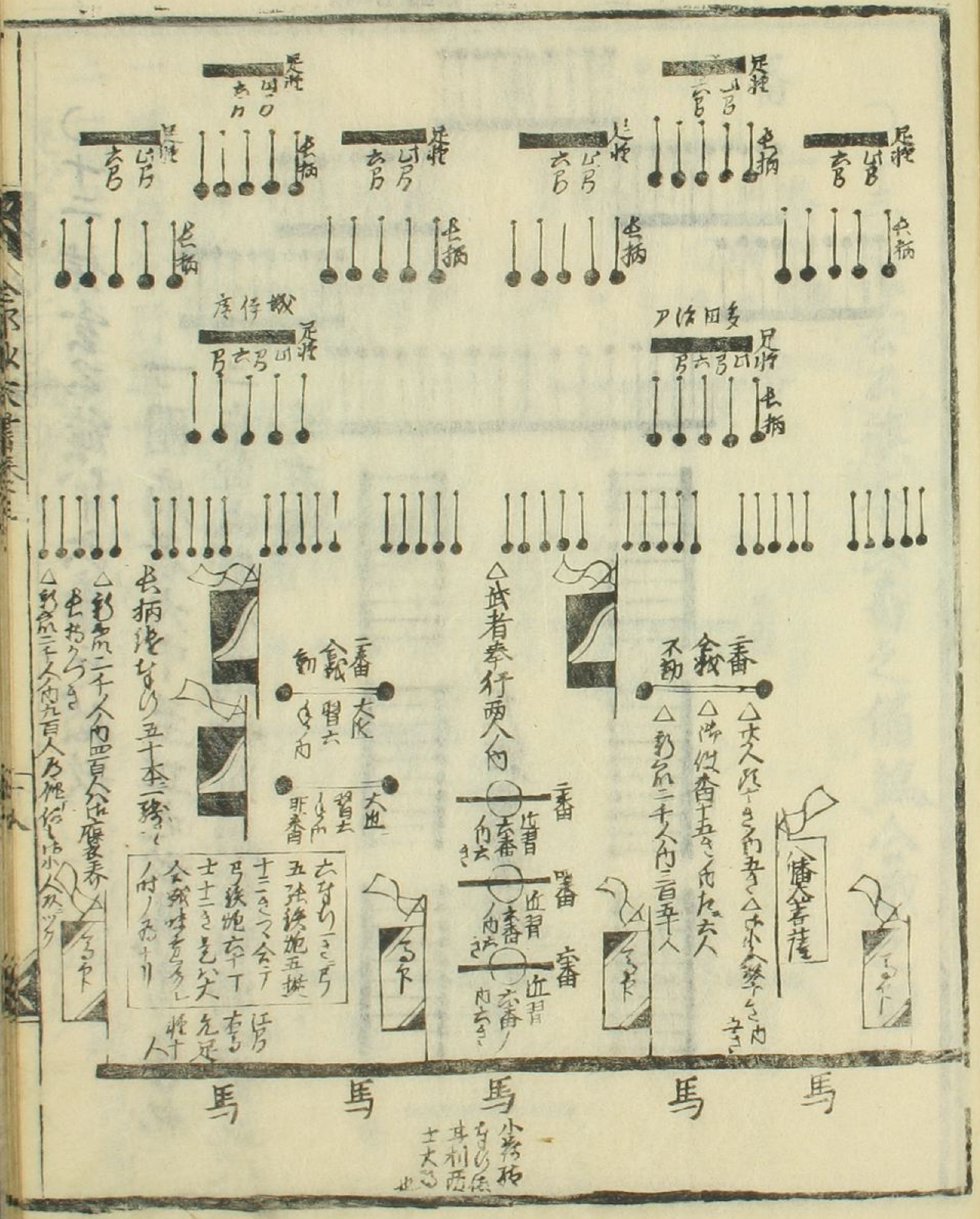
八 備ハ縦ハ如雲霽霞有其象而無其躰故散轉變号名乃據或ハ諸役者の武功ある者で備の手組を定るなり

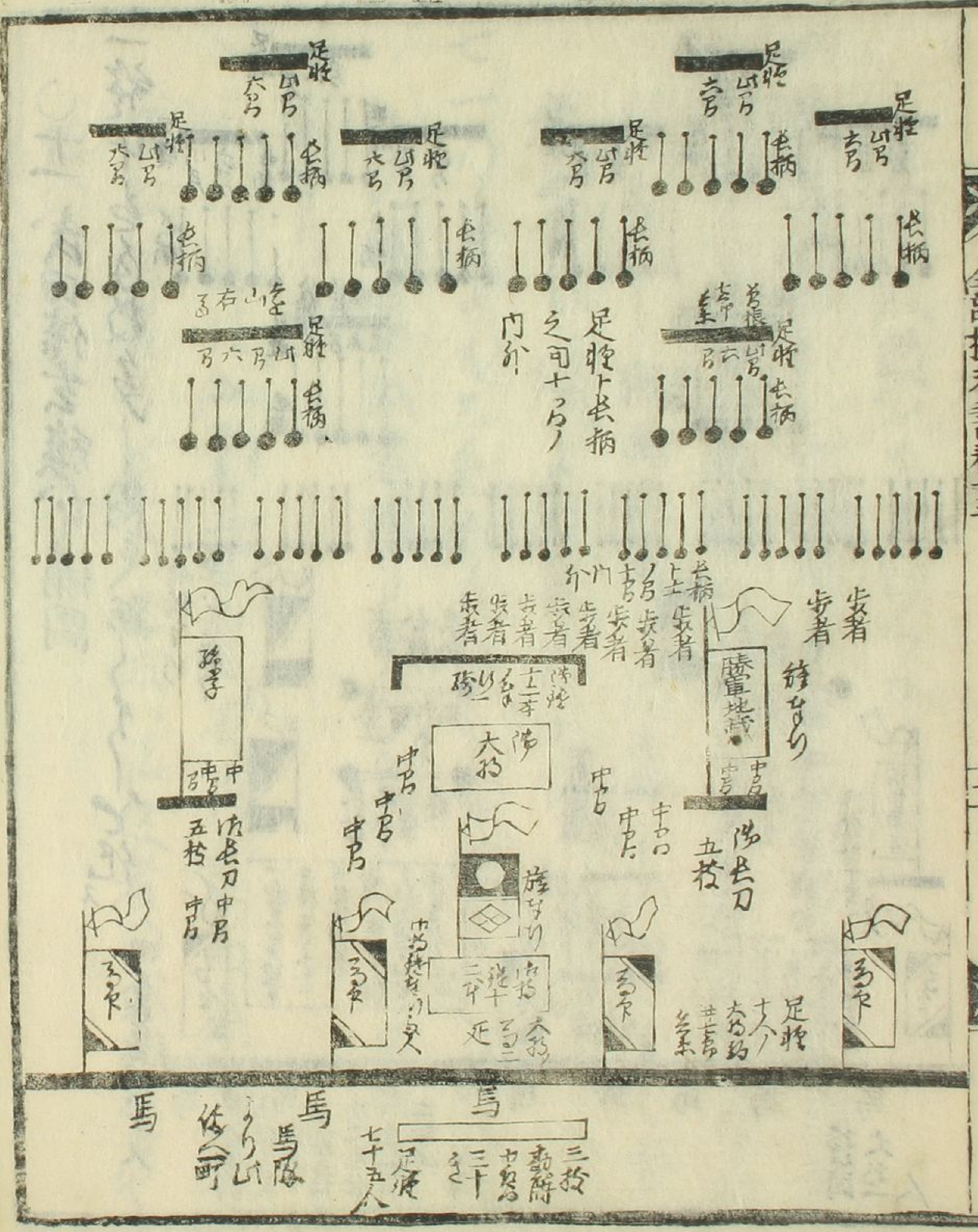


○十一 武田信玄旗本備図

一 旗本を手数多し固くかいらすりしを紀ス



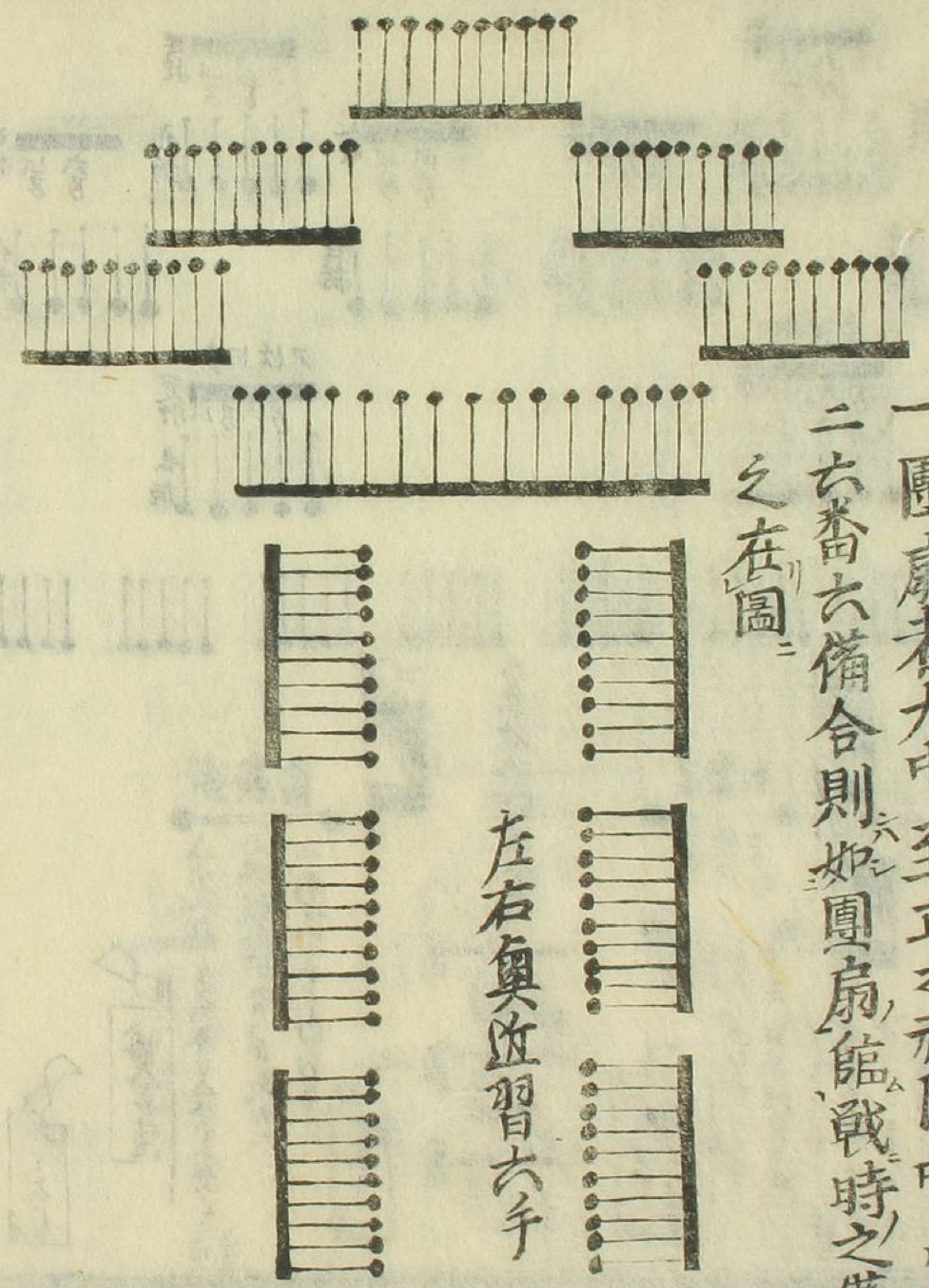

足軽
長柄
馬
馬
馬
馬
馬


足軽
長柄
足軽十長柄
歩者
馬
馬
馬

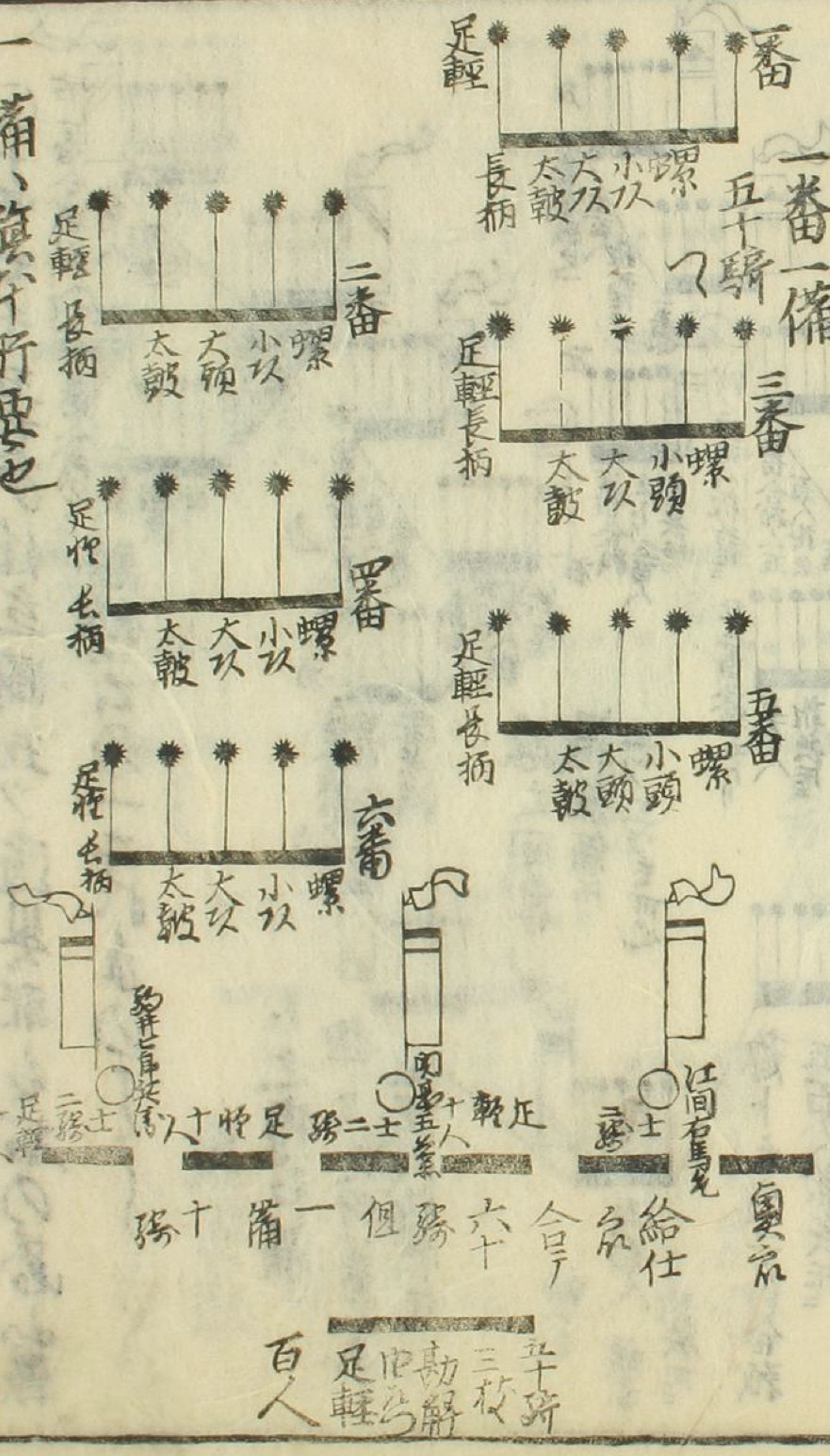
○十二 信玄公旗本六番之備形

一 圓扇者大中至正之形取ナ中ノ字也

二 六番六備合則如圓扇臨戦時之備此ノ之在リ圖ニ




○十三 信玄公旗本六番之備臨ム合戦ニ之圖

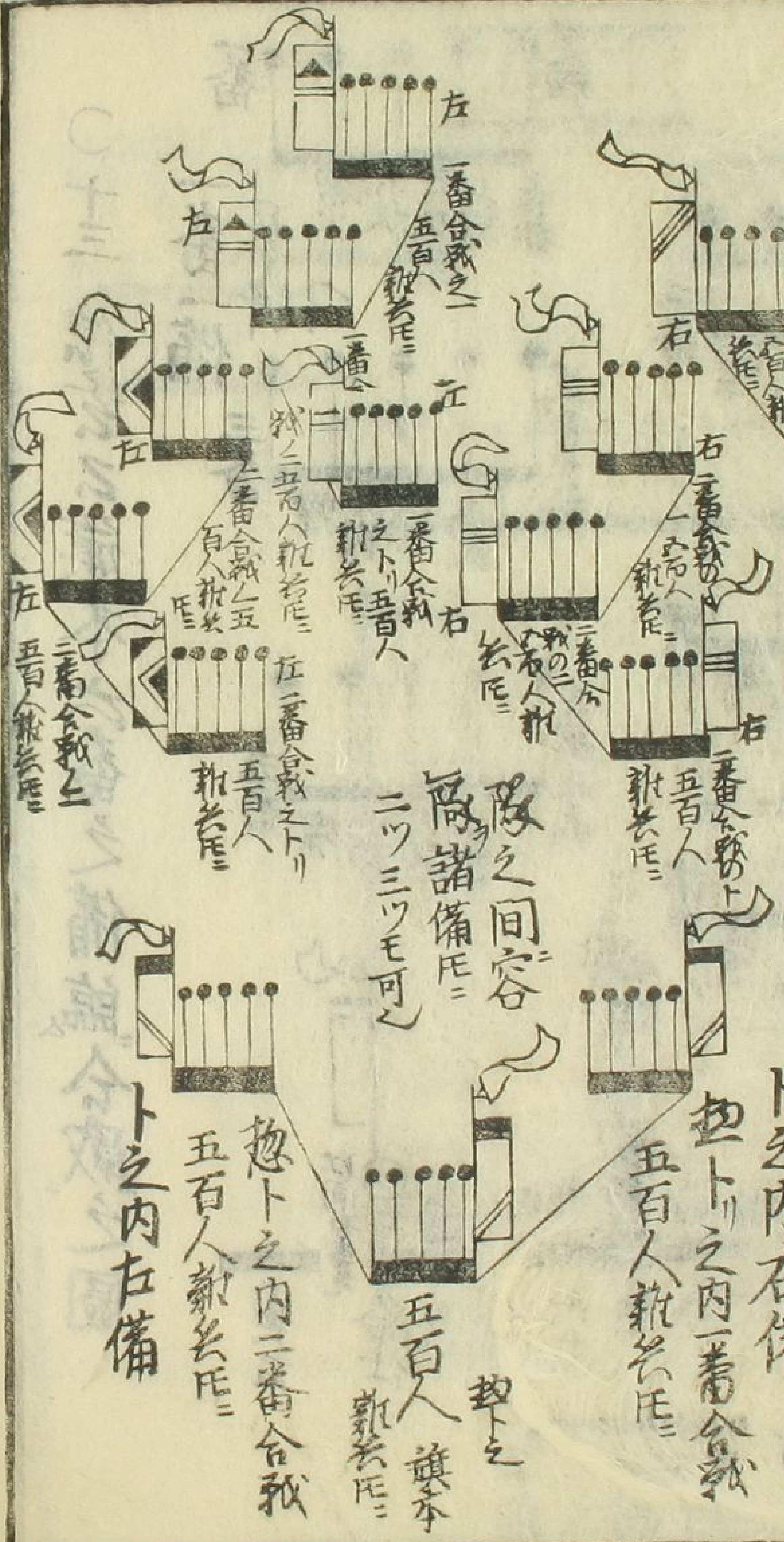



一 備ハ旗本肝要也

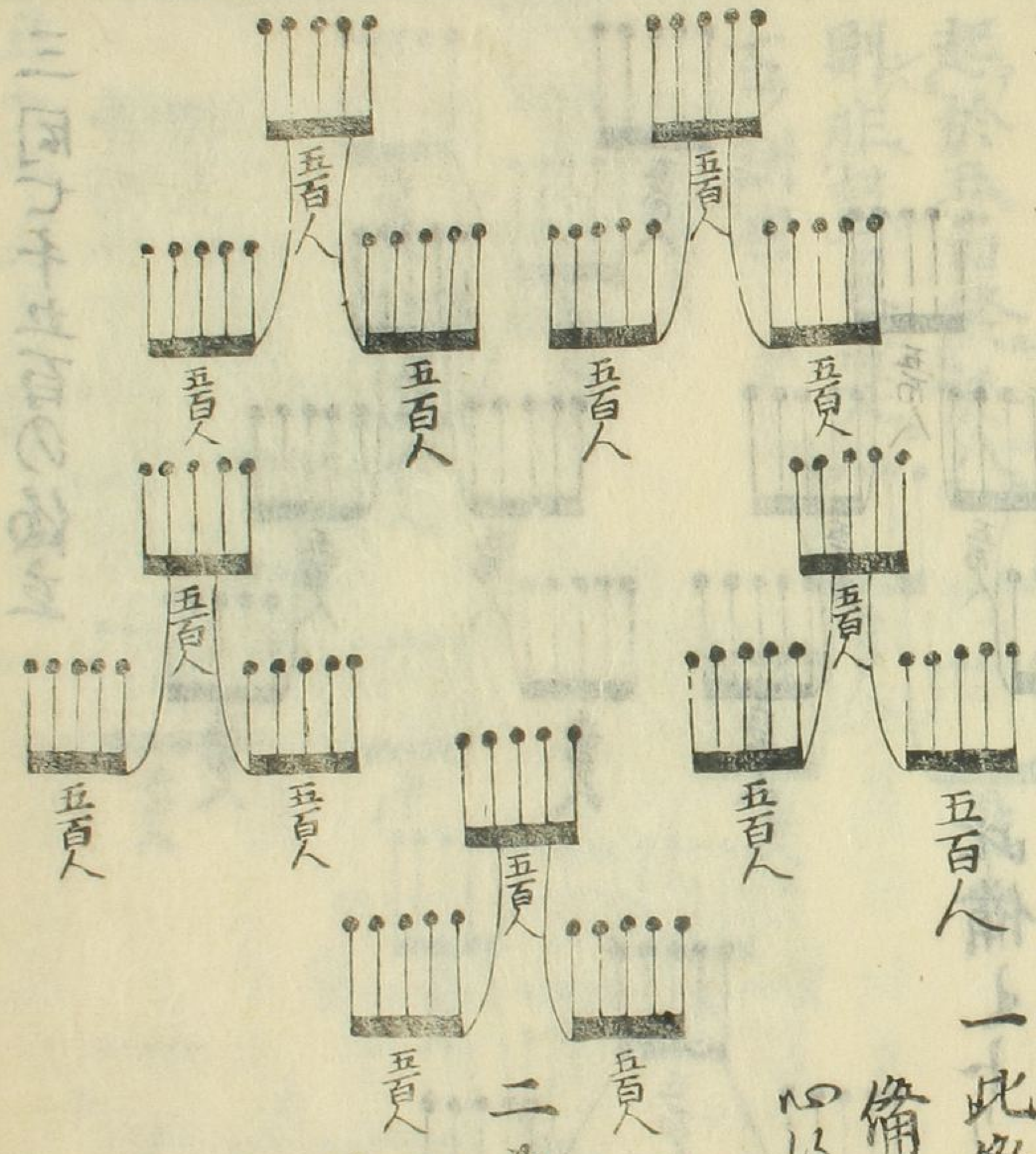
二 一備五十也廿五騎ツヽ二ニ分約番夕番ト立勝負の洞ハ約番ハ先ツ夕番ハ二ノ備取リ是一ヲ引別ヲ一別ヲ立ニヲ取リ

三　五十騎の内も一騎より一本の役長柄を出して

○十四　七千五百の備立図　五ツ道具配左右の前山縣
　勝頼公の二の備のこと



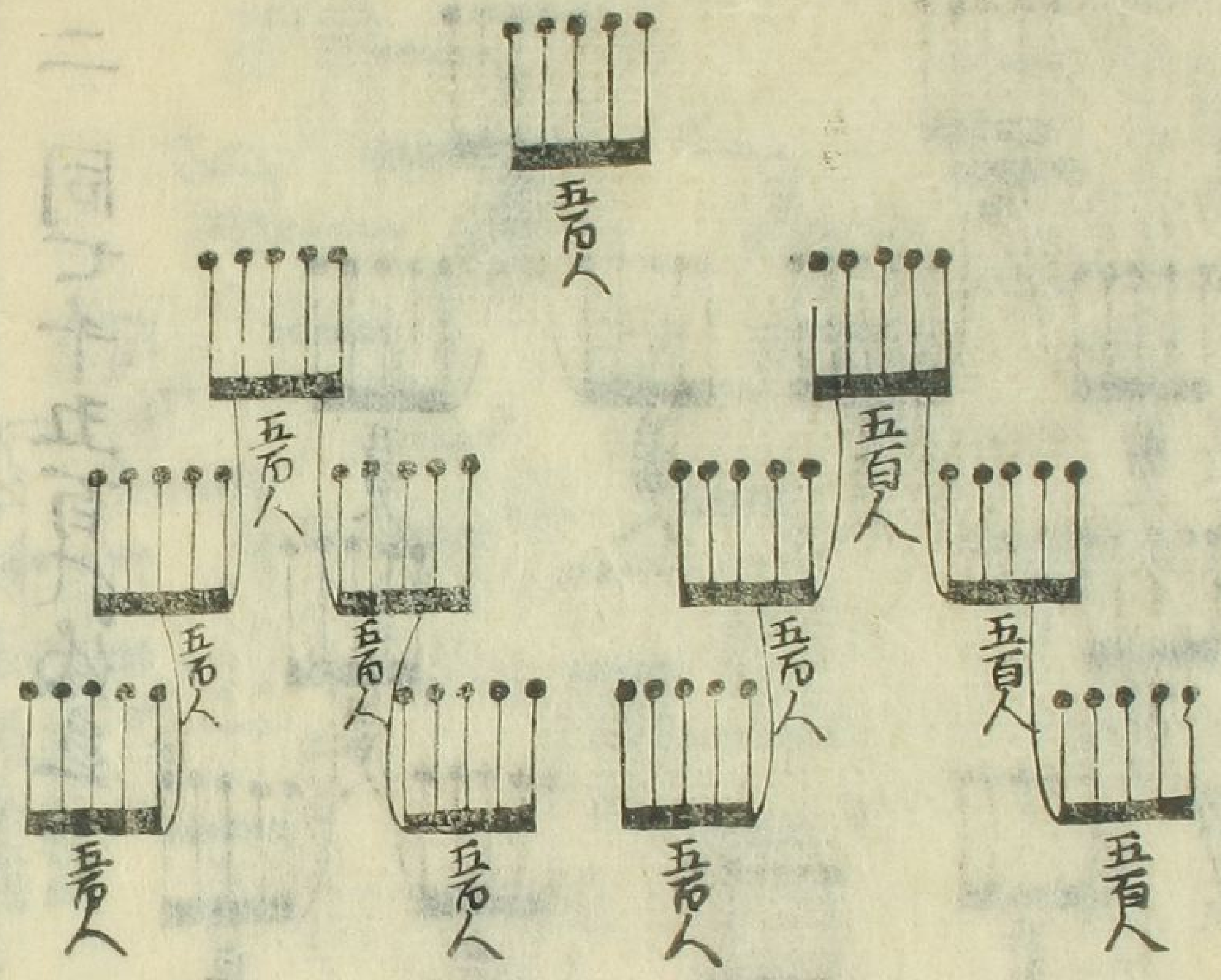

二　同七千五百の備立



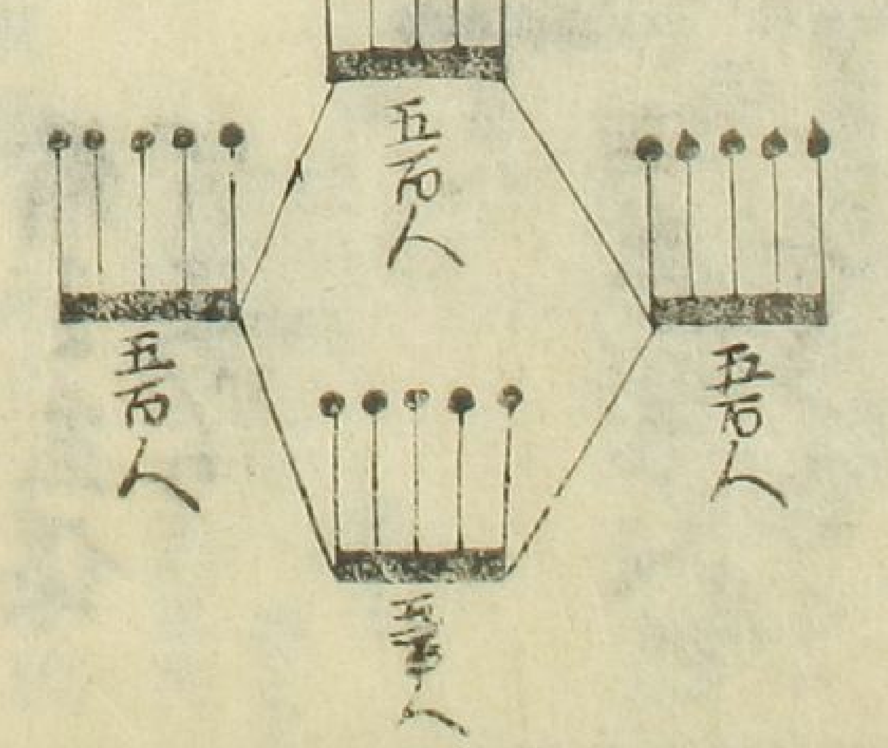

一　此備ハ右トリ之備ヨリ出ル様心得あり

二　右万人数ハ一手毎ニ道具配あり

三 同七千五百の備立

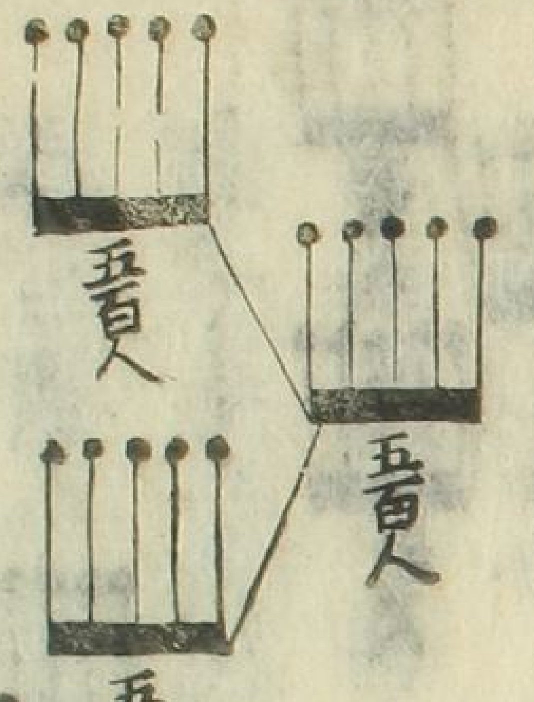


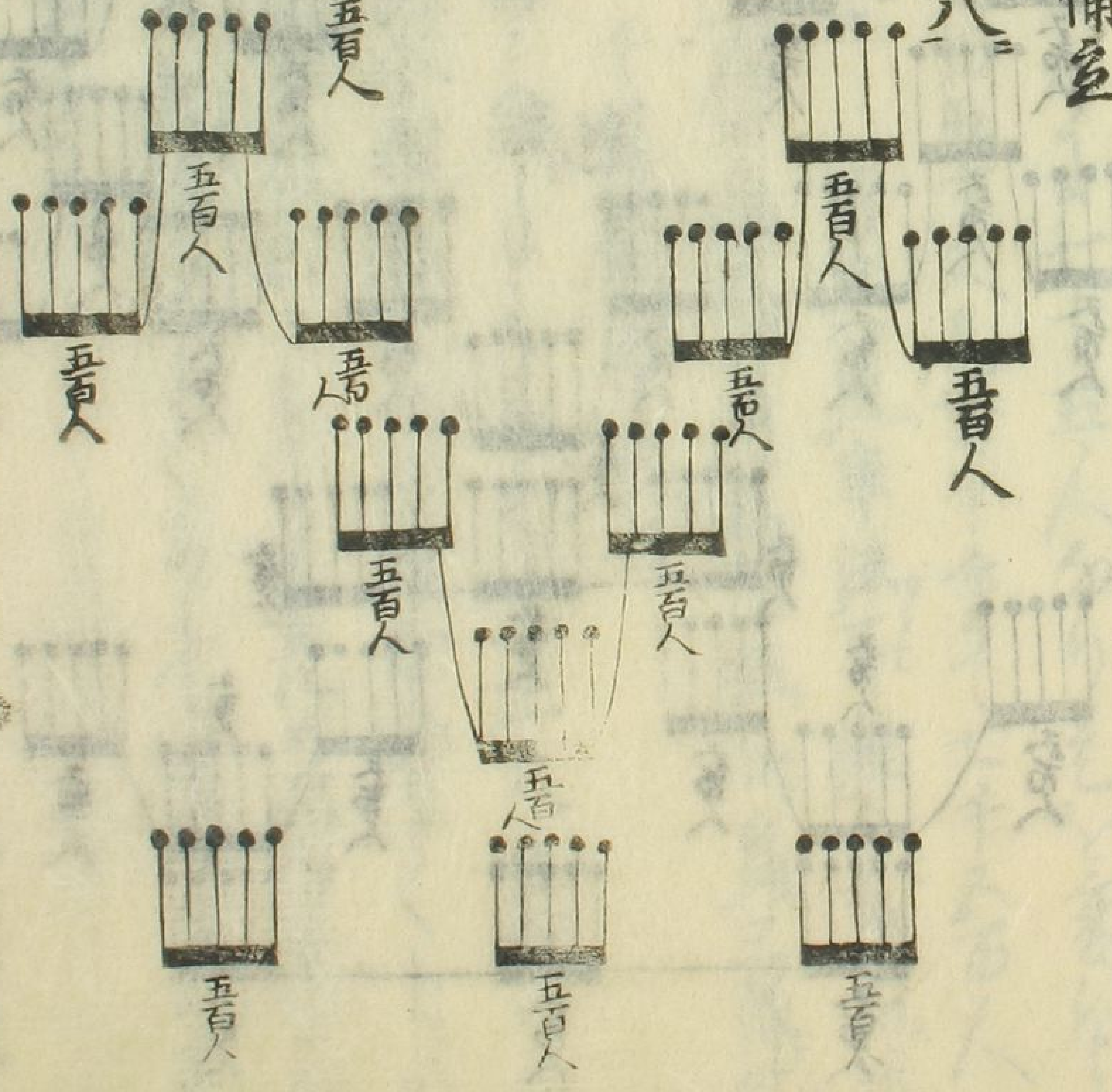

此備ニトリニ心得あり




四 同七千五百之備立

起於五而終於八則非設象寔古之制也

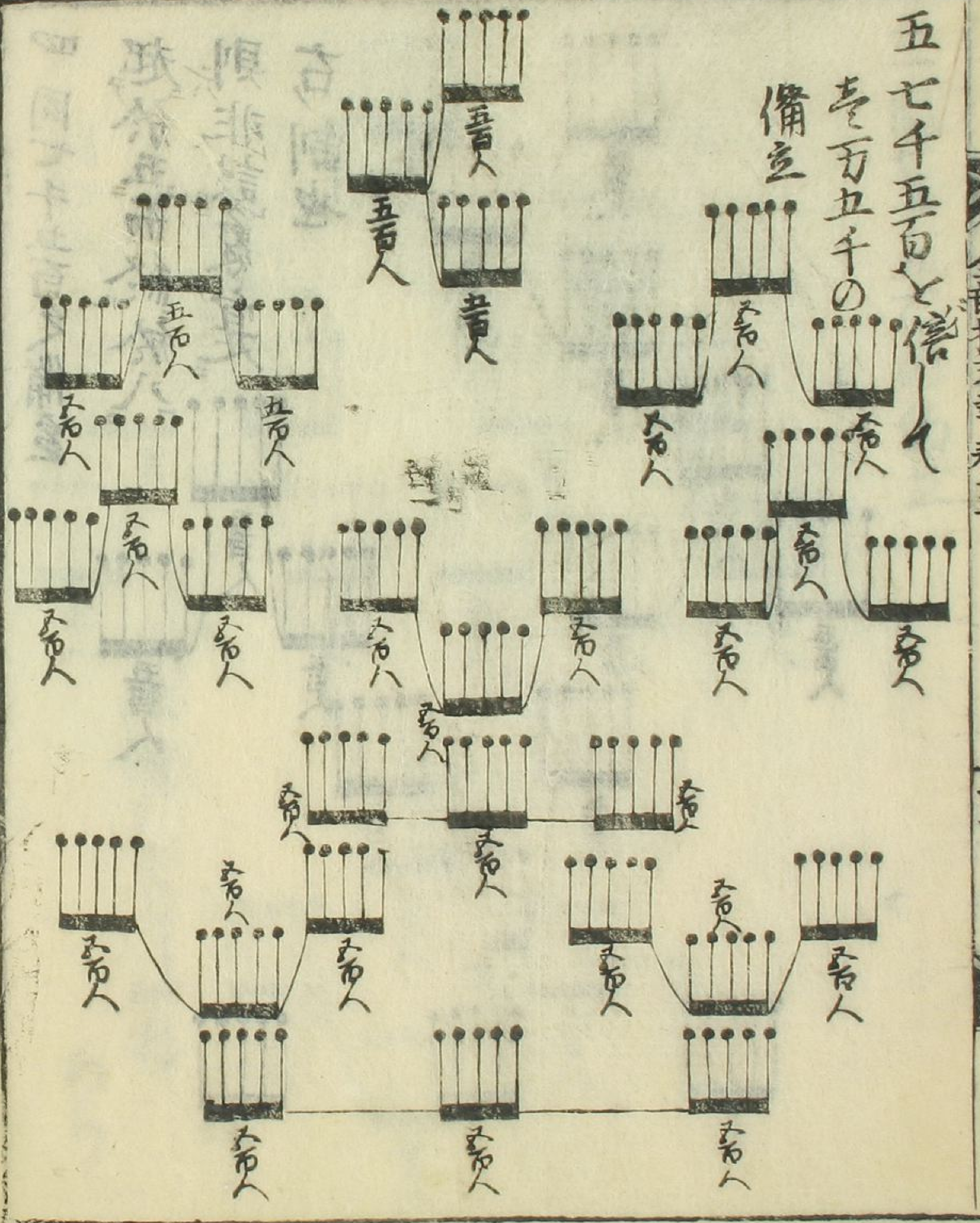


五

七千五百人と信して

壱万五千の備立






一 一車には甲士大将に七十五人あり是を変化して十重て七百五十又是を十重て七千五百人の備立如右 荀呉用車法耳雖舍車而法有其中焉 一為右角一為左角一為前拒分為三隊此一衆法也 千萬衆皆然也

二 諸備区々の陣に残るともなく一二三之備或ハ三陣九備ハ六の合戦是ハ何も旗本のごとくトリの備へを用小迫合大合戦是ニハ不足ものなりされハ五百程通ひの動静のごとくにして則勝も務まり強敵にハ敗走せん

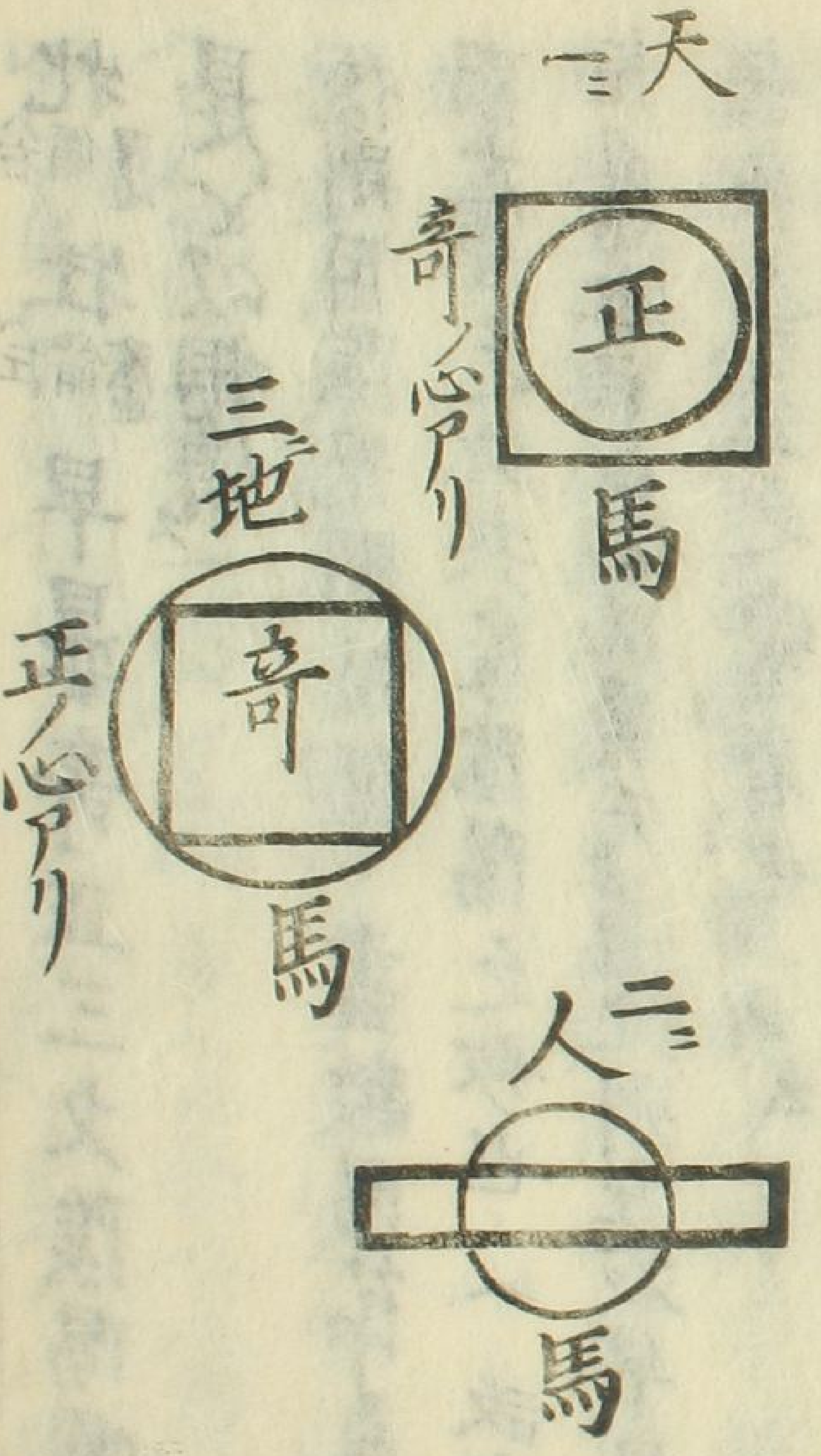
三 五千三千などの備ニてハ備間遠くして勝負危し

故に士三百騎をば一番に十騎ゞに合て六合戦
あり何間きをまへは先手に手負死人多く或は
崩れて二の手をまちて二の手に手負死人を
え運ては剛敵甚しく懸り前方の先備二
の手へ崩れかゝる故に二町余強内死

○十五　正奇幷　三才之備

△陰と陽陽と陰とまはる時は敵をは相定るをも
敵の様子或は地形によりトり小備

△陰陽の二ツ或は虚實秘三ミ分テ太鼓を以一つまで



一 牝(右備陽也)牡(左備陰也)早晏奇正三丈陰陽順逆之備是を以相傳ス

二 後則用陰先則用陽　盡斂陽節爲吾陰節而大奪之此兵家陰陽之敗也　設右爲牝益左爲牡早晏以順天道此則左右早晏臨時不同在乎奇正之變者也ト云々

三 合戦大小ありて正ハ身方の右敵の左あり奇ハ身方の右敵の右なり大合戦にハ敵方の一ツ頭あるを見んやうにも敵の右ハ身方の勝
生云是天文者のさる所用ることなりとぞ

四 已二而敵一則一術爲正一術爲奇已五而敵

一則三術爲正二術爲奇

戰勢不過奇正奇正之變不可勝窮奇正相生如循環之無端孰能窮之斯得之矣

安有素分之邪若士卒未習吾法偏裨未熟吾令則必爲之二術教戰時各認旗鼓迭相分合故曰分合爲變此教戰之術耳教閲既成衆知吾法然後如駆羣羊由將所指孰分奇正之別哉

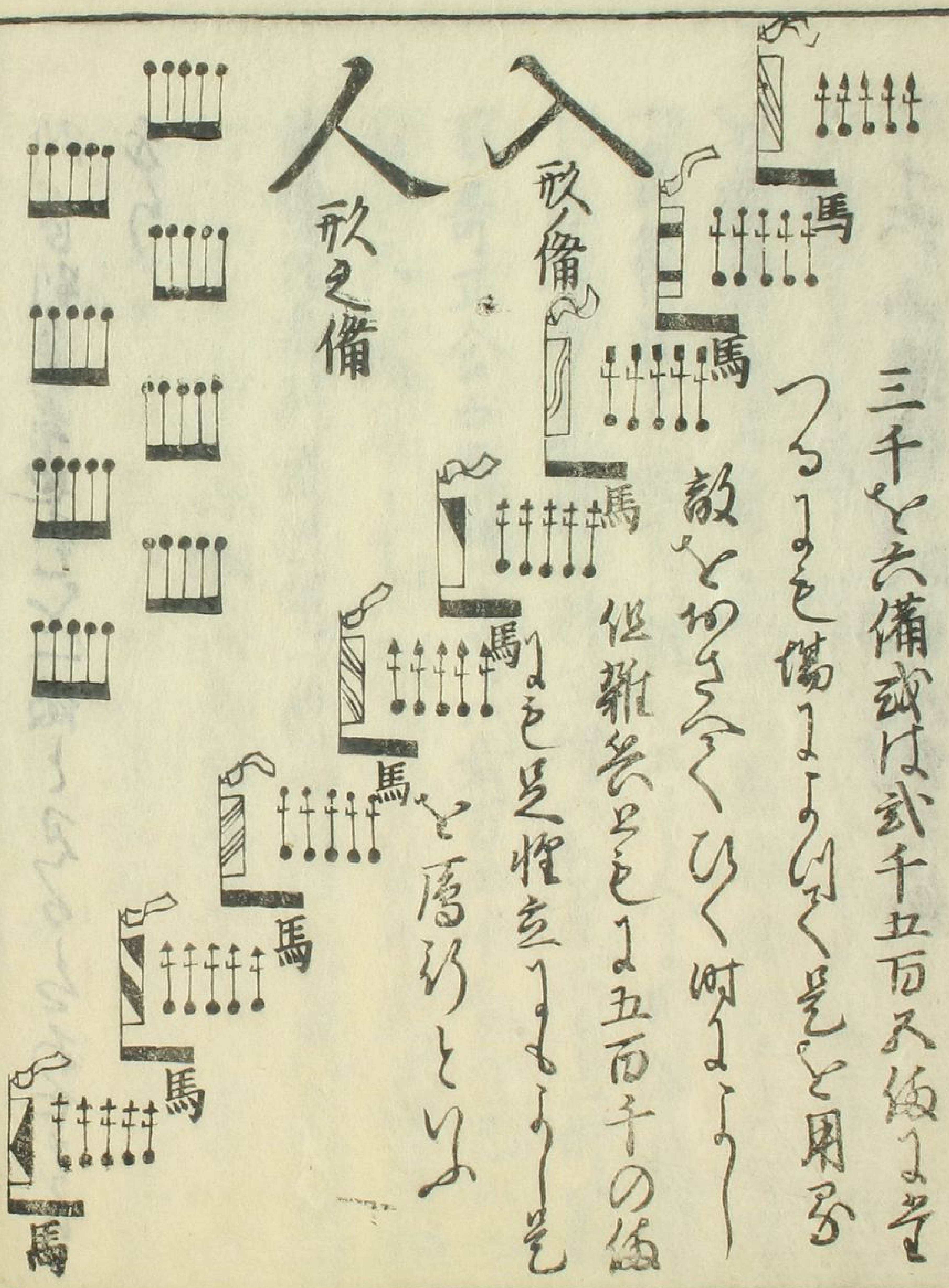
五 奇正ハ者頭の下知付ることたるめなれバ一手又百つありても或ハ一備を三手にして分て爲三隊ト或ハ先手七手十手と手数を定るハ懸引表裏

の三ツの進退よ螺旋敷とも勝利のまざとは
ともろよも遠く乗くしてハ合戦攻術し給ふ
と庸將と臣常敷士三萬兵陣ス千人ハ以其
一為營法と論て一組と五千人よて軍最也と
て巳五ツよして敵一則三術ハ壱万五千二術ハ壱
万奇正合る五備まてハ弐万五千なり巳ハ二
單と只一備よしてハ二万ス千なり天正四年丙子
勝頼云遠列横隊ハ發向の時先手とハ詰よ
と云横隊の備人ハ小笠原与八郎　山縣宮内
小菅　廣瀬　三科　乙系　石黒　五人よ下知させ給ふなり勝頼云
ハ旗本組八千ス百十七人を一組よ備くハ一手

別と別て一年也是を一組と見るるもおやまり
あり



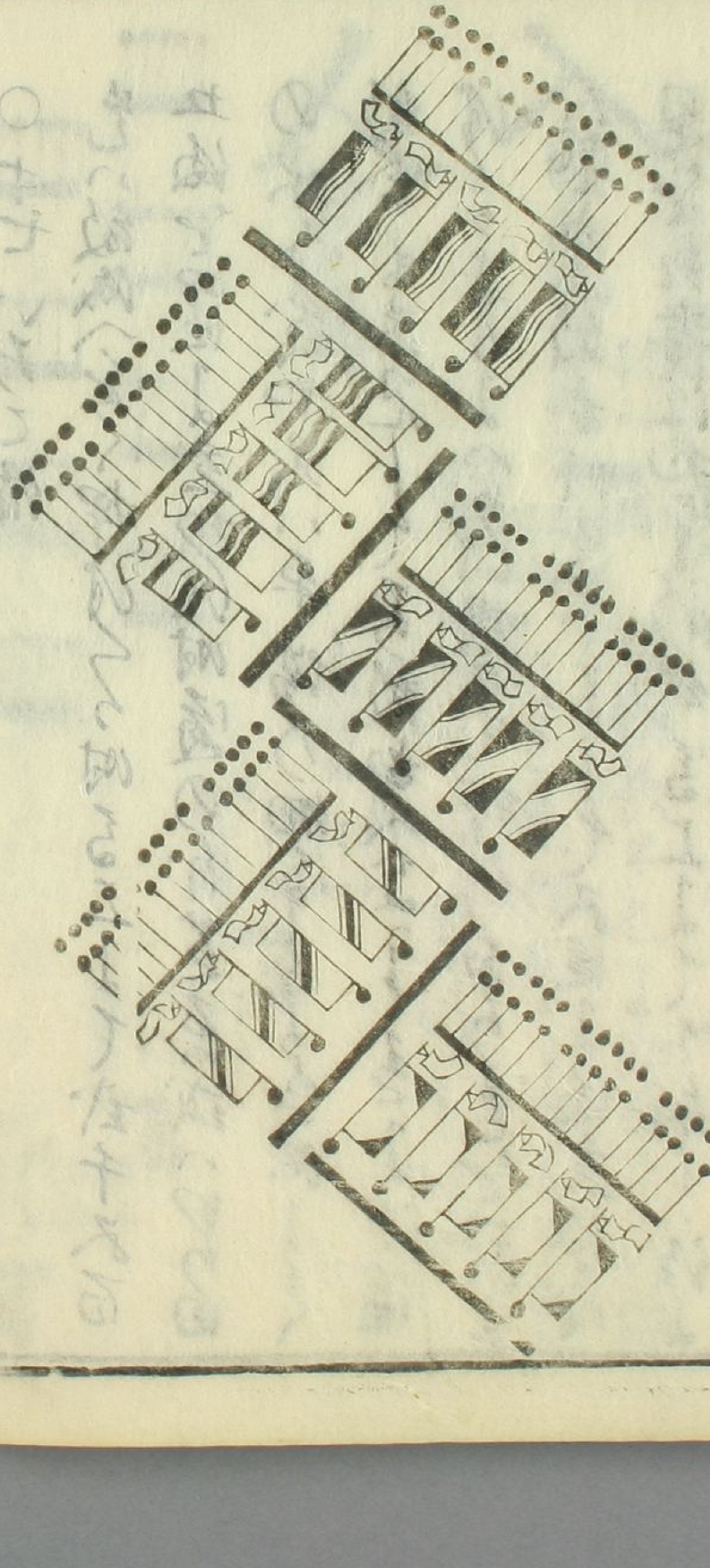
○十六　小連備付入數人數之繪




三千と六備或は弐千五百又は絵にも
つるゝも端より引く是を用ゆ
敵と向さへくひく時によし
但雑兵とも五百千の陣
にも是を懸立るもよし是
を屑形といふ

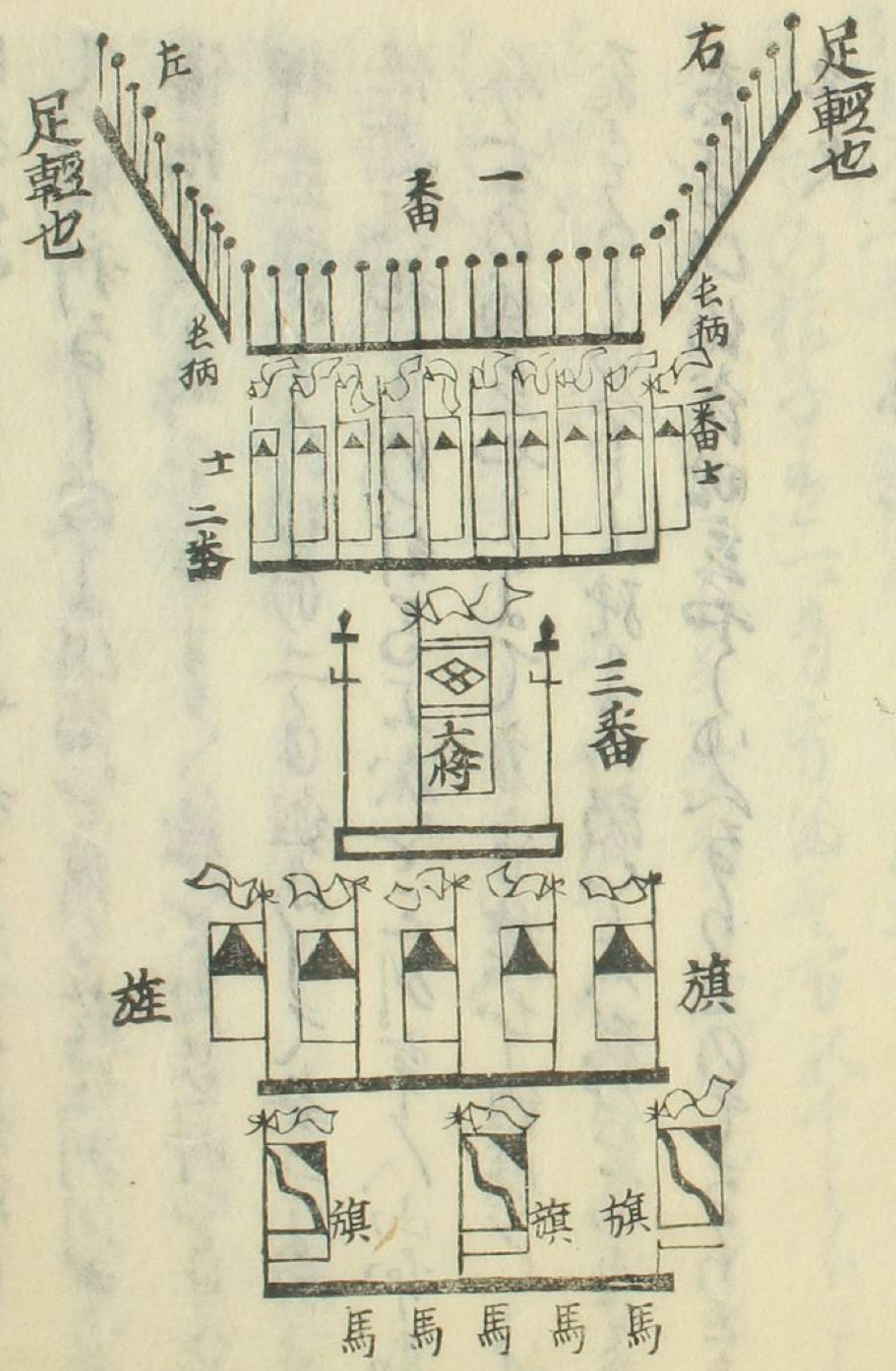


○十七いろこ備
是ハ敵陣へかゝく押ほくる時なるによて弐千又百
五備と四段に立切附道の外芝原或ハ田
の水なとや又ハ平場乃細き所地にも
敵合も未見して我敵あへなとるにも此備
ほくのまゝにハ必ず畳て押切見を一段に
又段とゆふ敵あは谷下るして又段に備立後に
奥と続者頭相立行討る上にて下知し頭に
て方々の押よると可言何合戦とも立る
ものなり



△此備ハ小旗ニ指子を挖把旗とハ
ゑすかりせ文ゆへ上を除畧す

○十八 侍分方備



剛敵備をとくし力を捨て勿みを損耗りよ
ては勝利あるし故よ此備を用ゆ於信州川中島
謙信方は悉く下るりまく鋒と兄足軽をさし
押立旗をとり出け二重に細めして当二よかゝる
但者板花菱引射るに於を三列宇人山本勘
介右の備立やうよて力方旗本細懸く村
兄もろしいとも強ゆ敵を大破付なきる
悪の備戎略立やりかゝふりのあすりとも
云く

○十九　車懸

備畳事肝要あるり当速二三ツ八一二備早ゝ上川
二三二三の目まてつゞくろ早く是とをむむす
ぶとは三車懸りよも思畳とんきろ但車懸
は二ツの拍子ある二三力方備を前又千より上
みくハあらむ二三よき勝あらん程ぞあらきを
三剛敵の備をよくそえ候て居ねうかゝる
もきを延ろよ去法あるしといよ

○二十　長蛇の備

信玄云ク此合戦よ小荷駄奉行内藤修理と
一の備をさし小幡上総と諸太井の敵城押入仕
やう陰と陽と陽と陰とある大将敵の虚を
あり　此時信玄云ク引く敵をとゞせらく

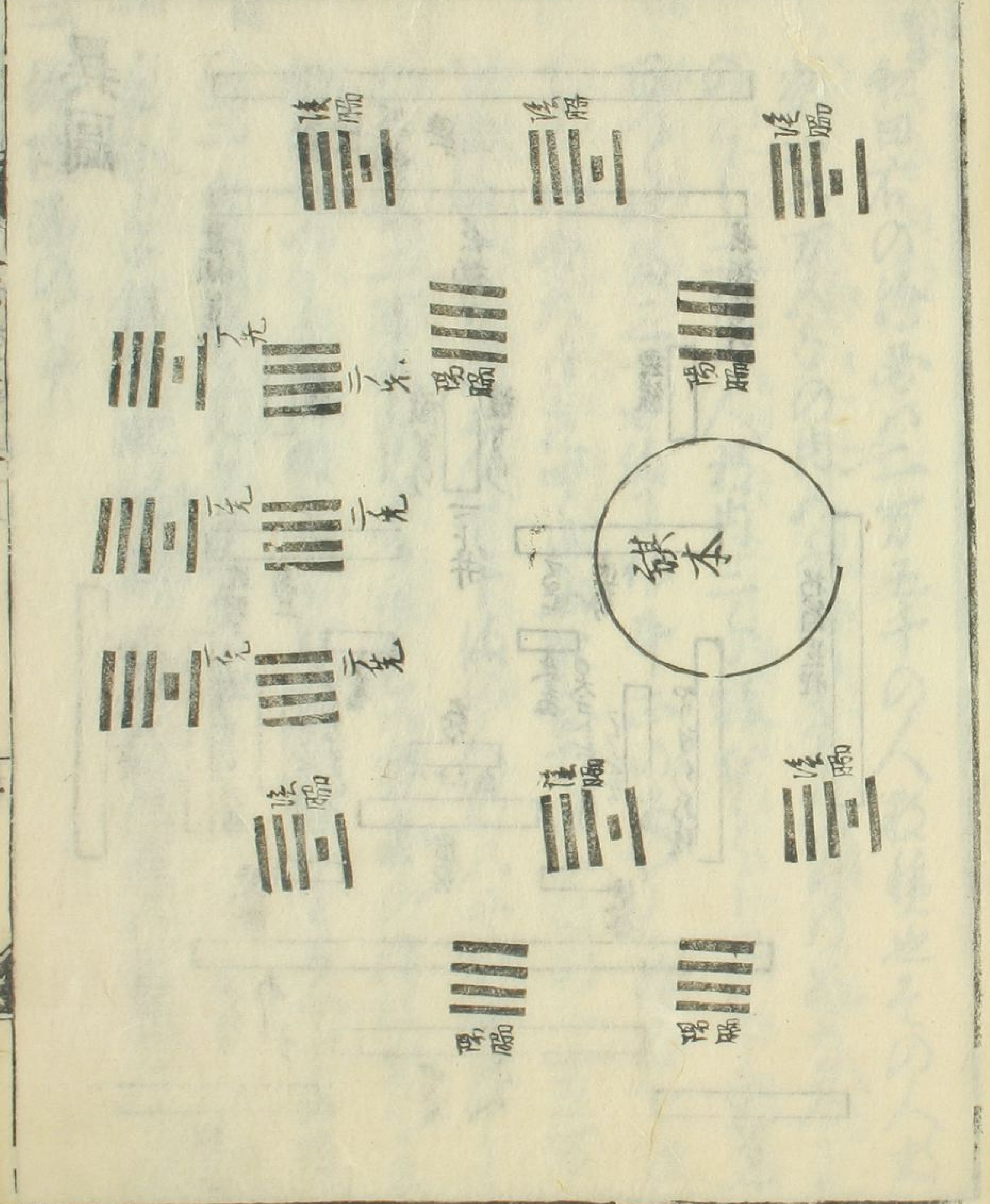
一 合戦勝利の正徳山へかゝりて蛇平陣に車懸けにかけ地かし畢竟蛇と車と一にして二にあらす
一 裏帷を作り　二本を築　三柵木をゆよく
けに三ハ遠近の大ねハ不及云に蛇車の備とよく
ぬ大ねまても定むる身方のかちなりんるハ必定也
故に良将不用之
以上正本終

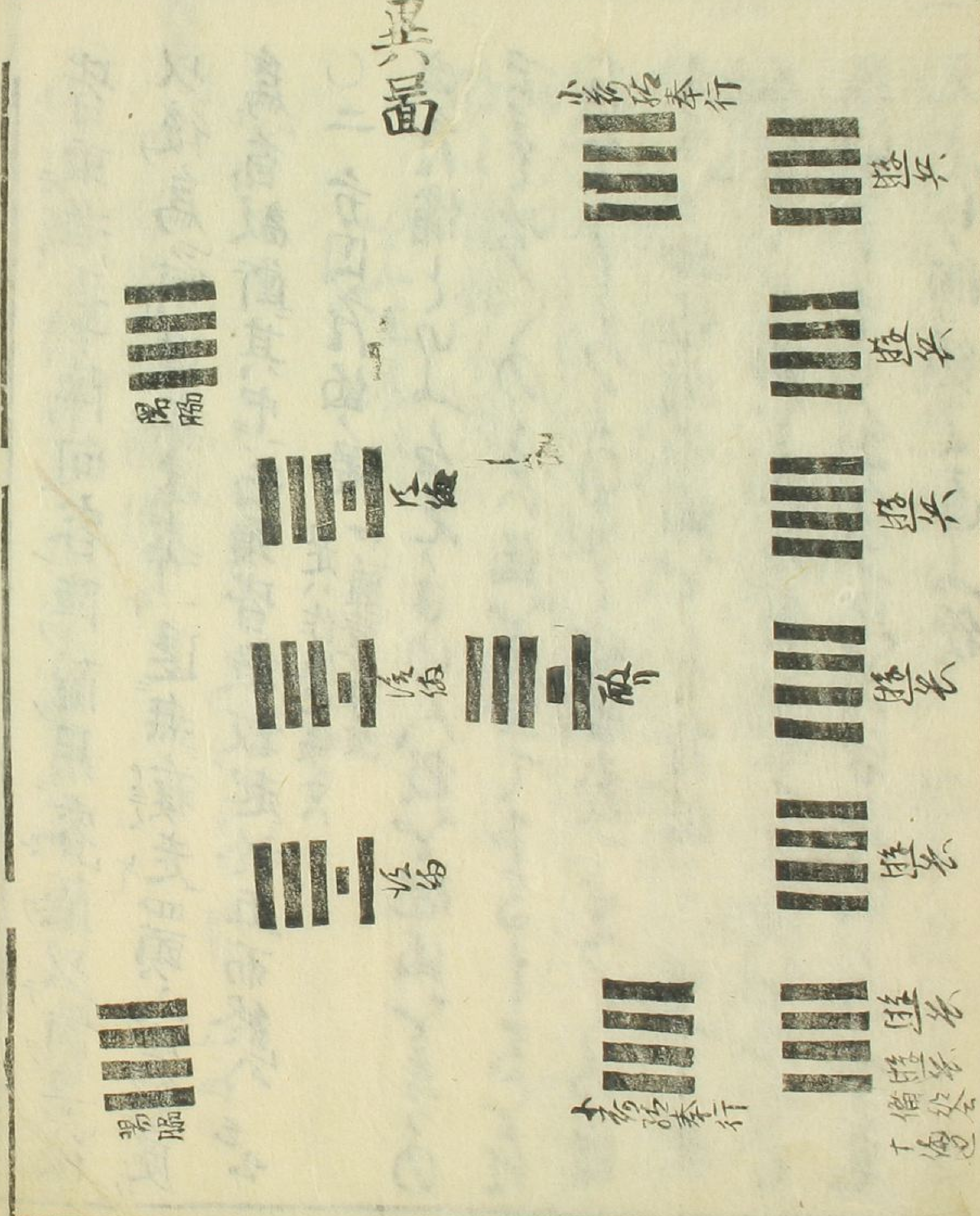
異本
○一 方円八陣座備
兵法曰陣数有九中心零大将握之四面八方

皆取進退陣同容陣隊用容隊以前為後以後為前進無速奔退無疾走四頭八尾觸処為首敵衝其中両頭皆救数起於五而終於八云云

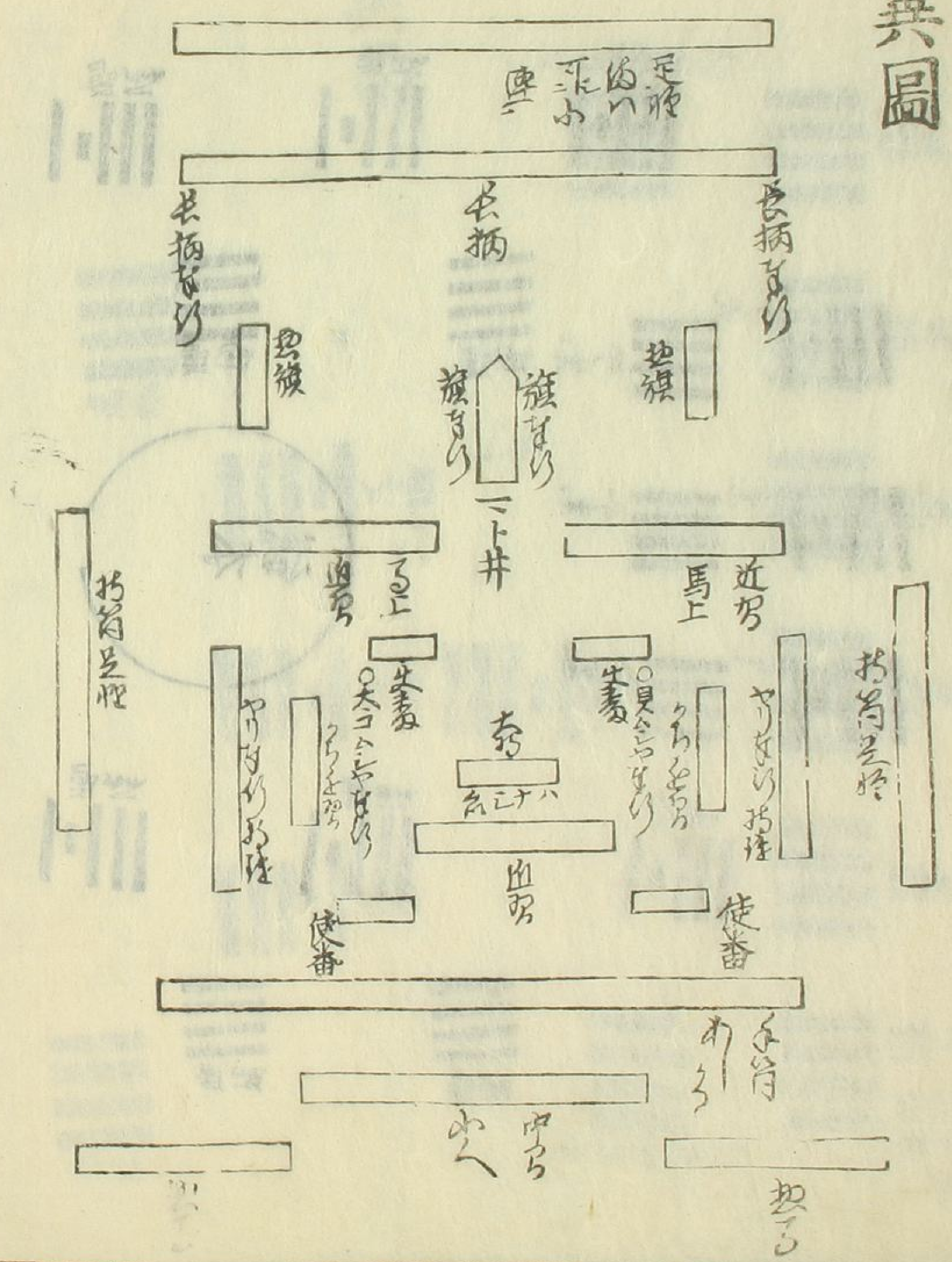
○二 方円備之図　是ハ作法也様子ハ可随時口傳深

云備といふハたとへハ五の人数を配備と云ての
ことくの外ハ備を畳て下るしるとは
左右からしろよひかりて居敷て先く乃備
さりとよ前後同の備とゝそ方備といひて異
本ハ云くとの備を立て其異を取て合戦をおしても
戦ひをりしまらぬ事をいさ方備といひても見
えぬり師に従ひて遠し頒




兵圖

# 異圖




異本
私曰右の備ハ二万五千の人数積也その人数割ハ二万五千の内八千ハ圖のごとく旧の備に居るのこし一万七千の人数内三千を旗本とし一万四千を五百つゝに分二十四備に作り奇正の備とる陰陽と組て此備を四手に配合て六四備の一万二千と働備と定めこれにて十備の人数八千を遊軍とまそ配合二万八千あり組是ハ方象の作法ナと云物なりやうそハ敵によりて工夫あるべし　口傳

同

一 ○三 方円軍法九ヶ条之事

一 手分并組手配結解八ツの作法乃事

二 備陰陽のこと

三 一三陰陽の事

先と陰とを陰すとして陽の心を二と陽と陰陽

あして陰の心わり

兵法曰左ッ為陽右ヲ為陰ト云云

亦曰陰ハ謂陰其機ヲ陽ハ謂盛其勢ヲト云云

古語ニ曰前箭ハ猶深後箭ハ軽

又云ク前箭ハ猶軽後箭ハ深シ

四 倹間積のこと

一より二ヒのゆらゆ又町外二と放ち又のゆら十町射脚ハ旗

なよ射様ハ一二ヨ志めんす但敵ヨ倹人ぬし

ようりに傳

五 弓の二ヨハ見物のことし

六 あまり小旗強き弓ハ働宿いなき気を上と云ゆなり

七 遊軍勝のこと

八 三ツの合戦を可秘なり

九 そのゆひとめとりのそうり皇勝を味すまのと

まん気なり

異本○又弓の座位乃なり

又弓の座位といふハ又十騎六十騎射一位用ル

時の位と可立陣法なり方喩座位の時さえ

脚役の伝ヨハみな又弓の伝統可用なりロ

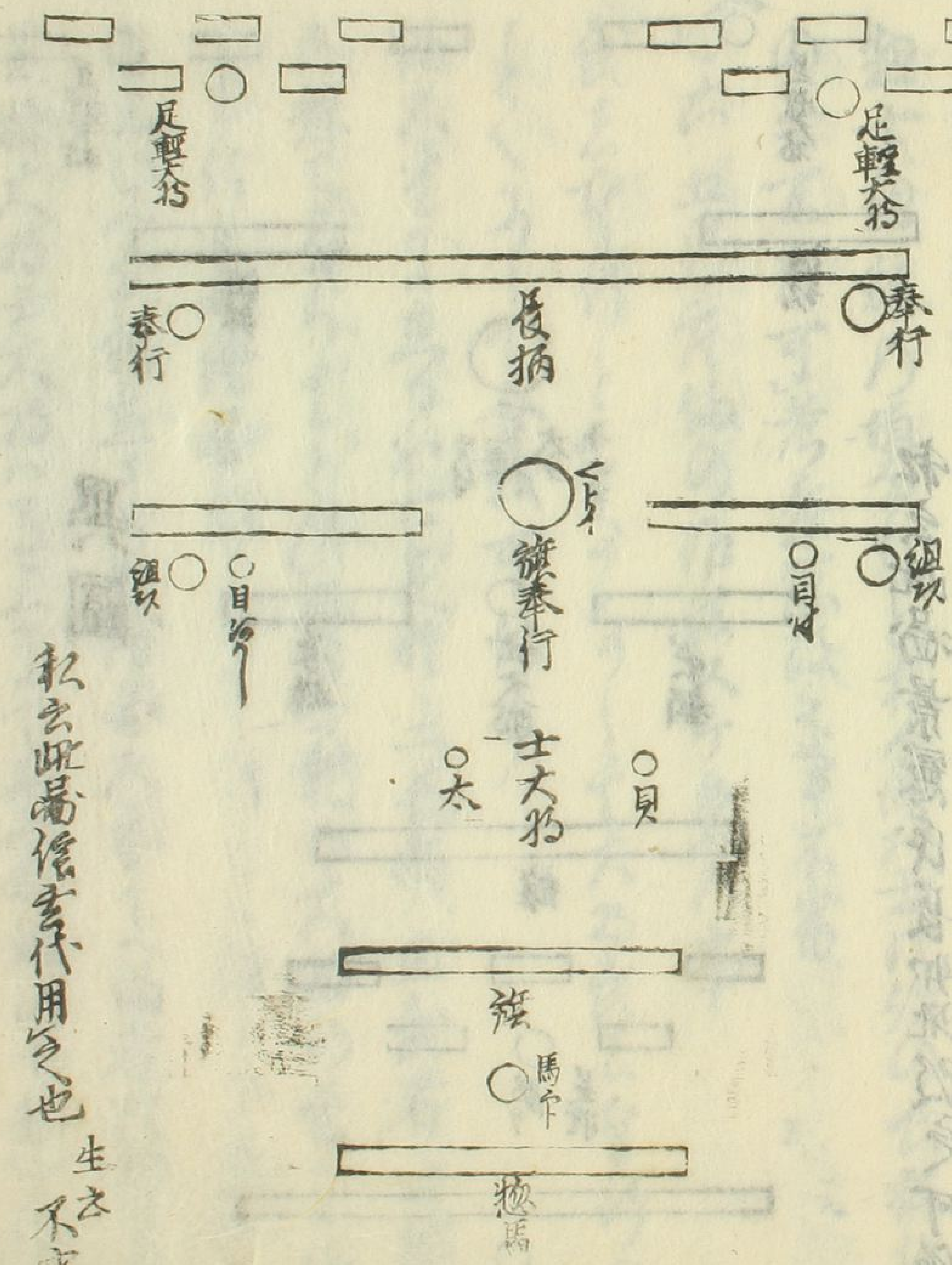
傳ふべし

生云備ニ写上の附ハ四行下写乃附ヲ又行の後と
あるといえり並書ヲ以可見合ス

異本

○五　又行ノ府後の略

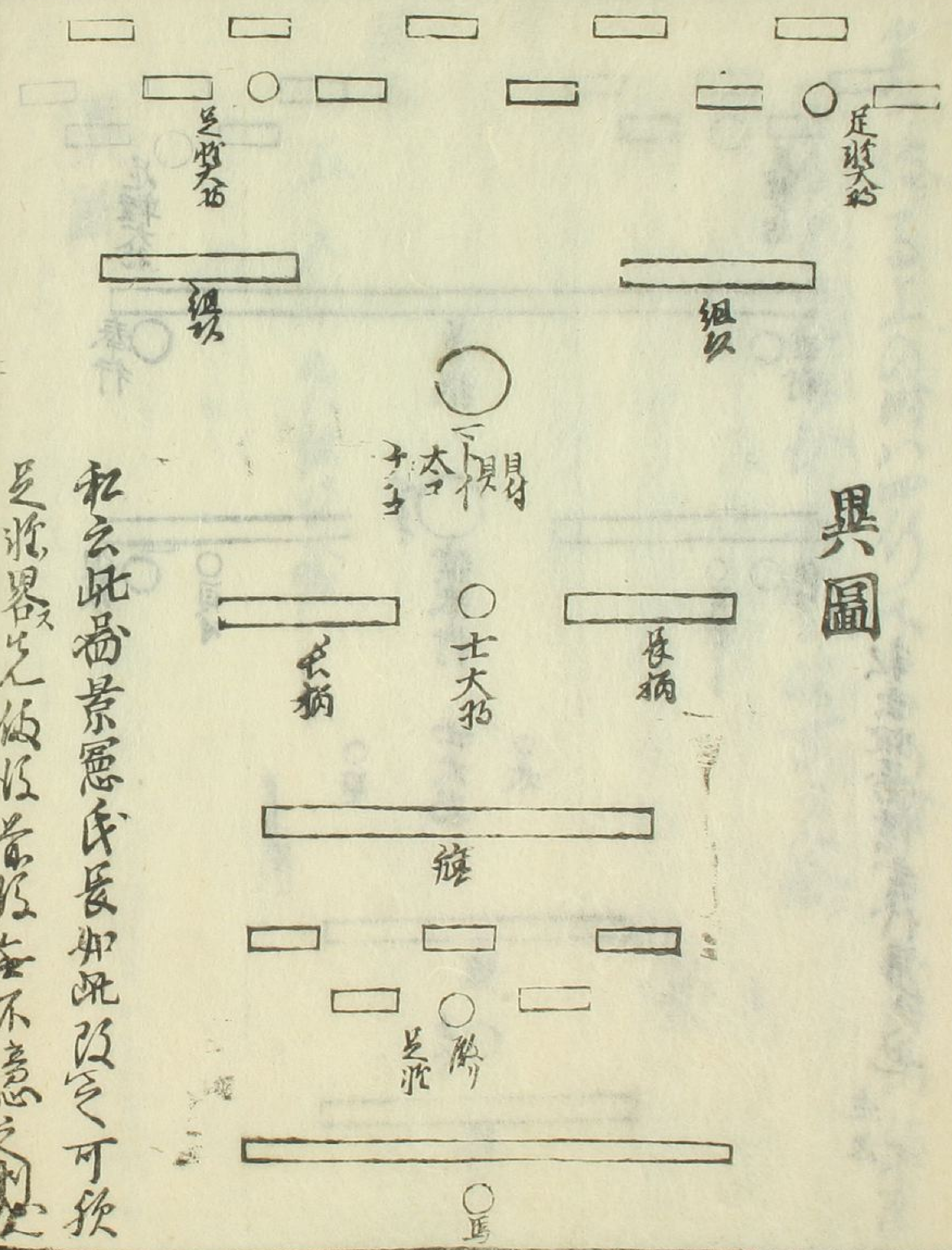
異圖




私云此圖信玄代用之也

生云不審

異圖




私云此圖景憲氏長卿此段ゝ可預
足軽畧ゝ先ニ備段當段無不意之利也

私云備に鉄炮足軽ハ重長柄縫の垣重長柄縫ハ
重士重縫乃垣なりとわる時ハ士先手の長柄縫
の登る程可考景憲段之事不審

異本○六、五行在備の作法及ケ条乃事

一 武者奉行とミるすなしを大将武者奉行の
よくみして合戦可仕るす

二 備及宣よ立る所一二足軽 二長柄 三武者 四縫
及懸るなりましひ貝太鼓ハ大将の前ニ備
へし何も如絵図

三 る上ハみな折立く如絵図及年ニ備者取抱すめ
足軽大将士大将ハる上ニて采配備の下知を仕候

四
足軽ハ勇人わり是を二三ヶ陰陽を定メ人ゝに一人
てけのこの伝をさしそへ小連につゝるりてゐ
を討てゝのれたうを敵にもりるゝに教して失つゝ
ひ葉ぬをの易を今くきへし

五
小連につゝるあるけのど足軽大将のちからの士
如くへし

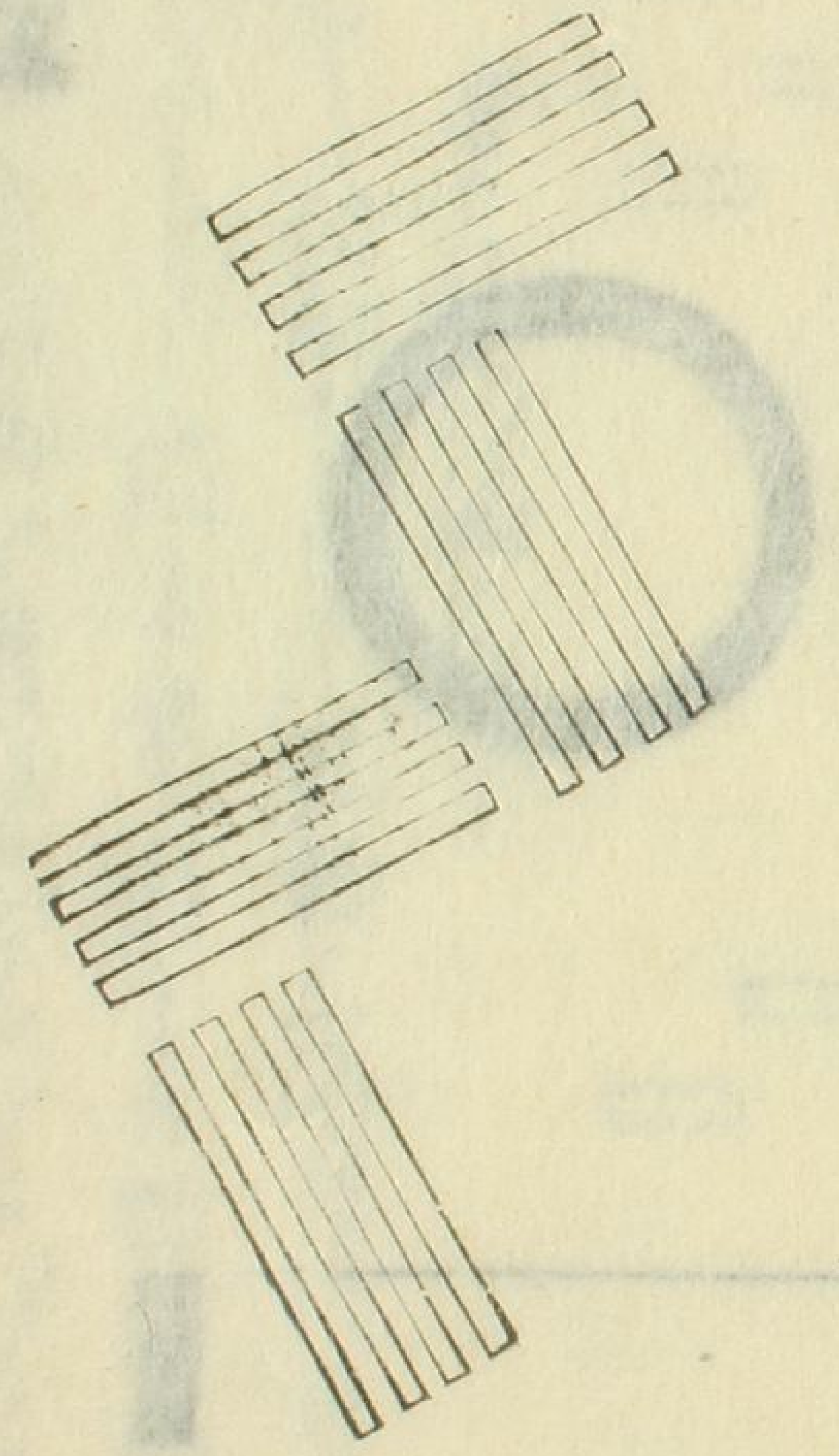
異本　備雲

○一 長蛇の伝事

叙云長蛇の伝と云ハ右ハ足軽其次ハ長旗さ
次ハ弓ゐ土を引ハ懸旗と四引つゝなりへて切
引伝へといふハ蛇の尾を引りてさし曲尺にしてまく
にゆろに原ハ長蛇と名付る口伝　生曲尺にして
乗ハ右引ゐ先ハ引つまで地形にまかせく白る寄
足軽をそのて曲尺にさろとゝハ須迎して合せ
の伝乃形ハ常人斯の通りくる所の足形ニ盡ス

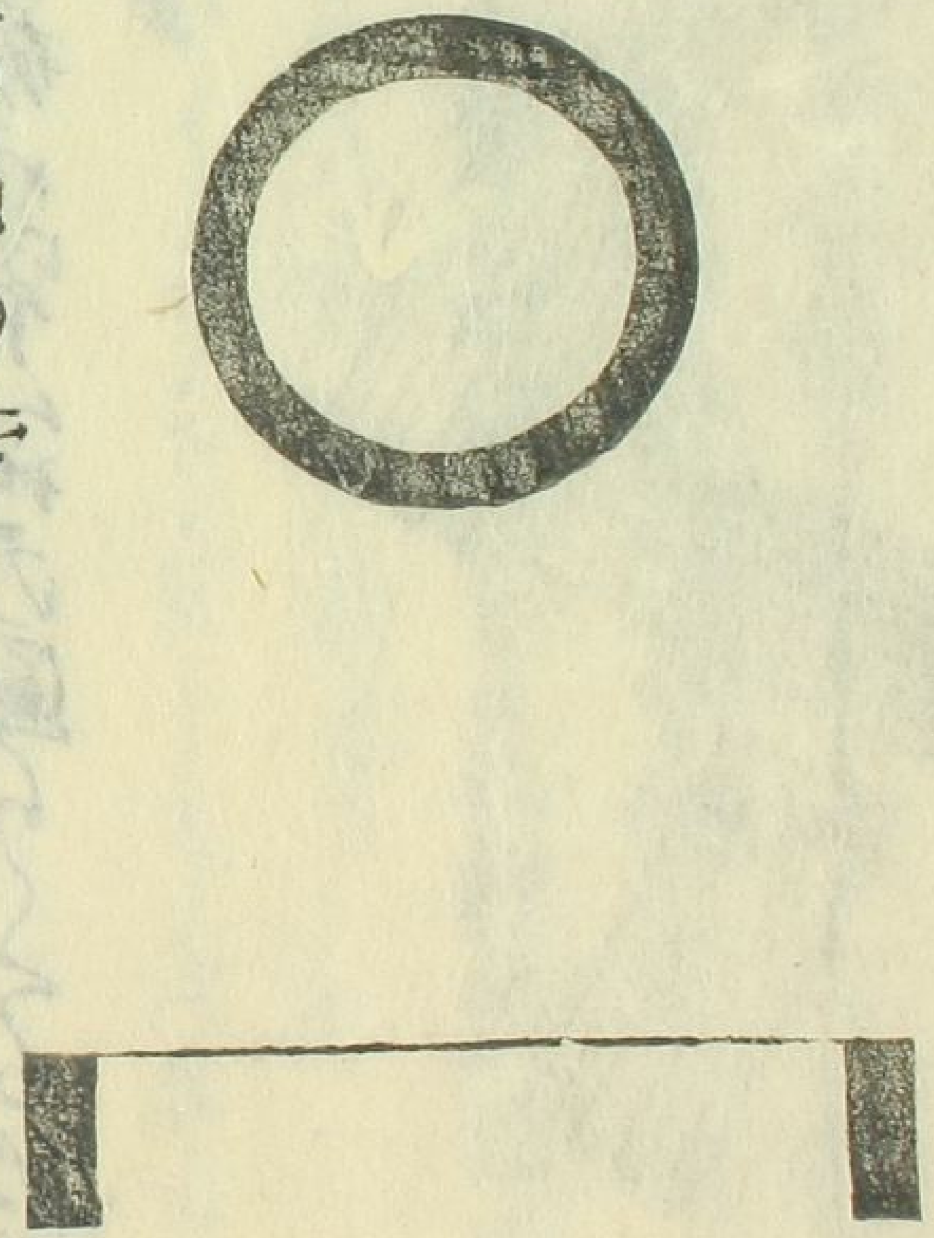
図

○二 円形の伝乃事



急勢と云も備を總て廣く備るを云なり口傳

圓形圖

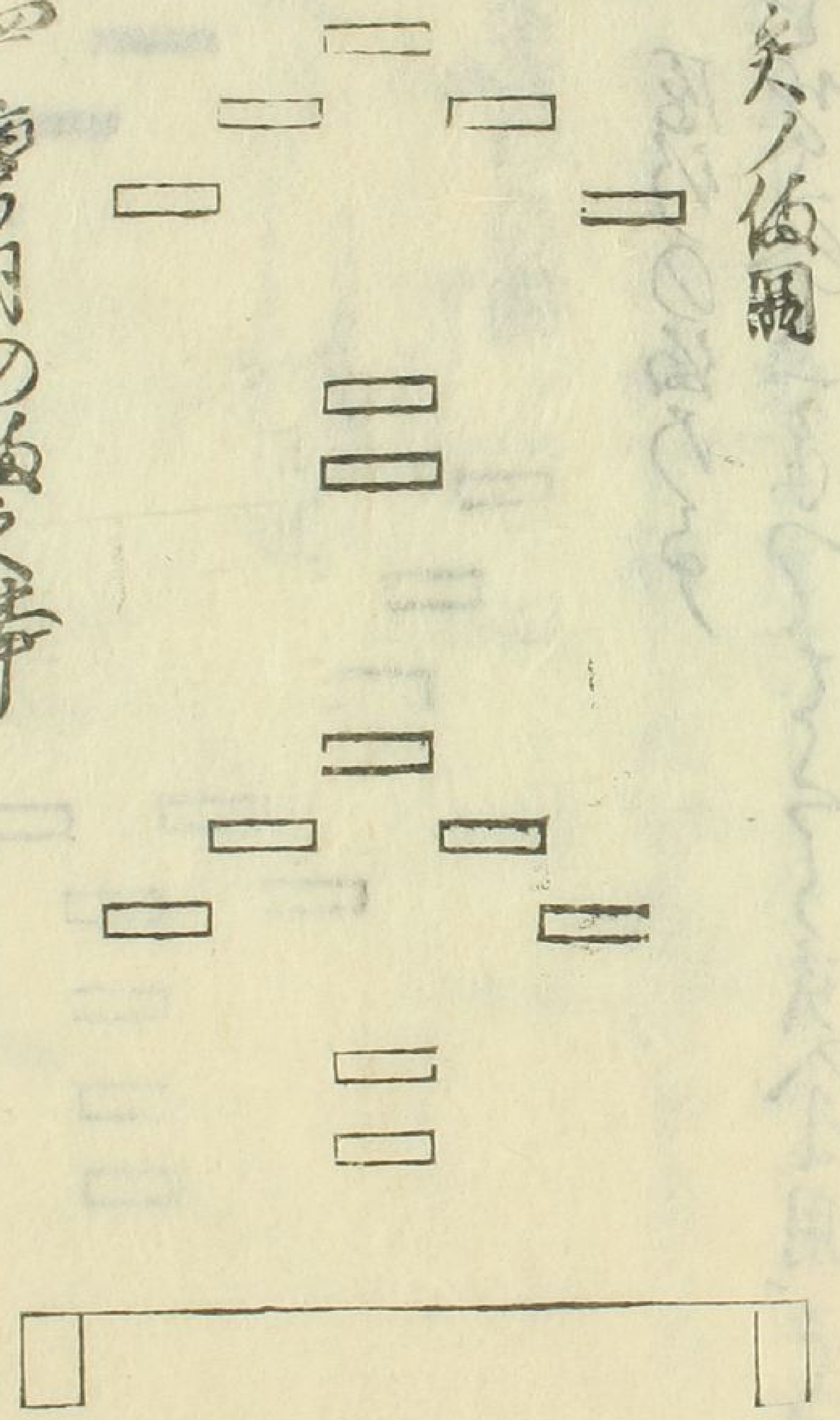


同

○三 鋒矢の備乃事

此備ハ甲ハ向ヒ敵ニ始メ軍フ乙ハ矢ニテ勝ヲ取ル以寡撃ツ衆の兩用ル備なり前箭後箭の備なるへし口傳

鋒矢ノ備圖

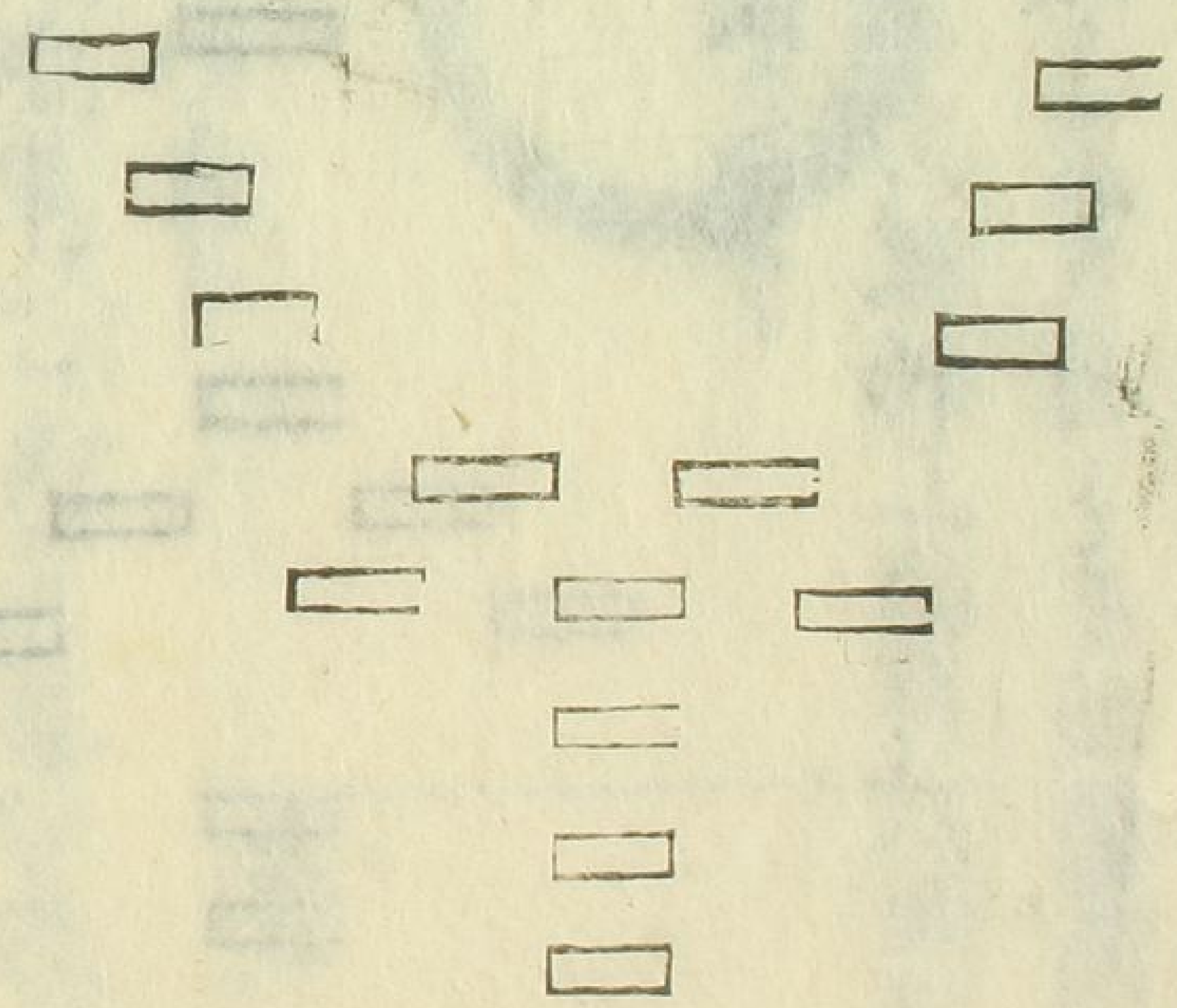


異本

○四 雲ノ月の備之事

左右よ相向てその形初三の月ル曲つて雲らく見るがごとし故よ雲ノ月と云敵の備かとやあり此ハ味方此備を用ひて先をとりて備を左右よわるしたハ討向右ハ切し付るれいなり口傳

彎月の陣圖



異本

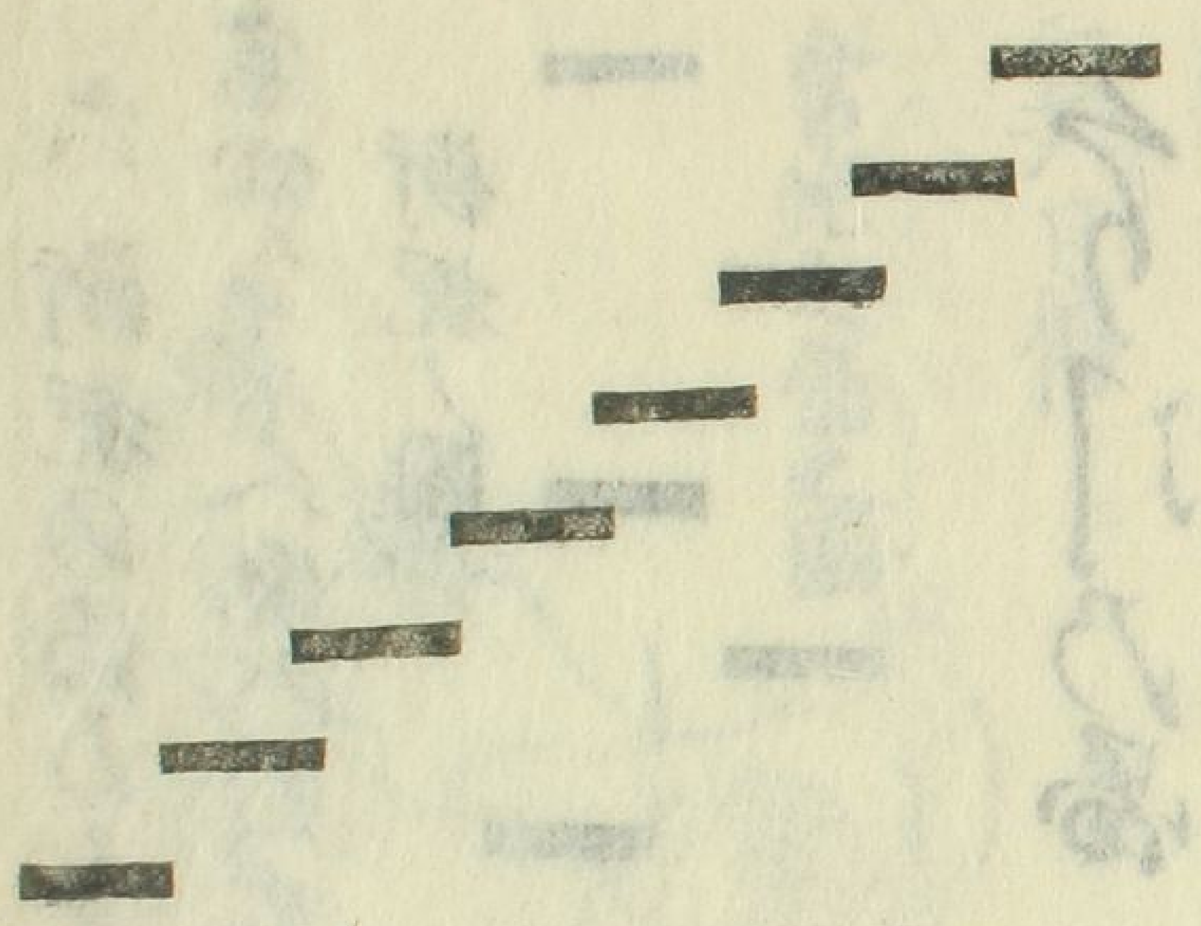
○五 雁行の陣なるを

敵を切くへて一手つゝにてかゝる勢へ用ゆ其陣

の行なき故ニ雁行と名付ル又云たてへ横へ

てき行列を乱しぬを雁行と云と云し 口傳

雁行の圖

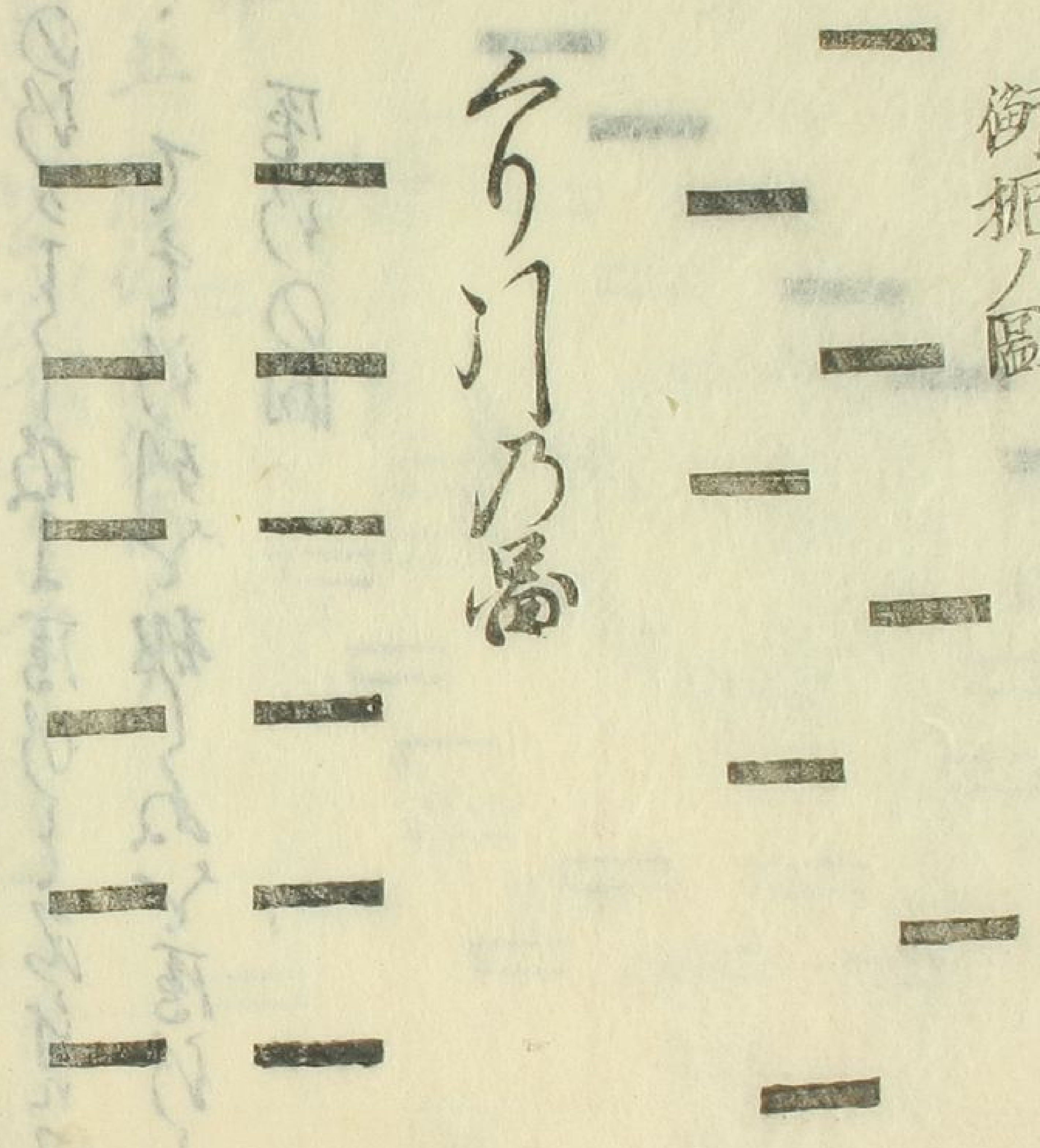


同

〇六 衡扼の陣乃事付り圖

常陳なる時ハ人陳入敵火又る圖九陣用ル

衡扼ノ圖



行門乃圖

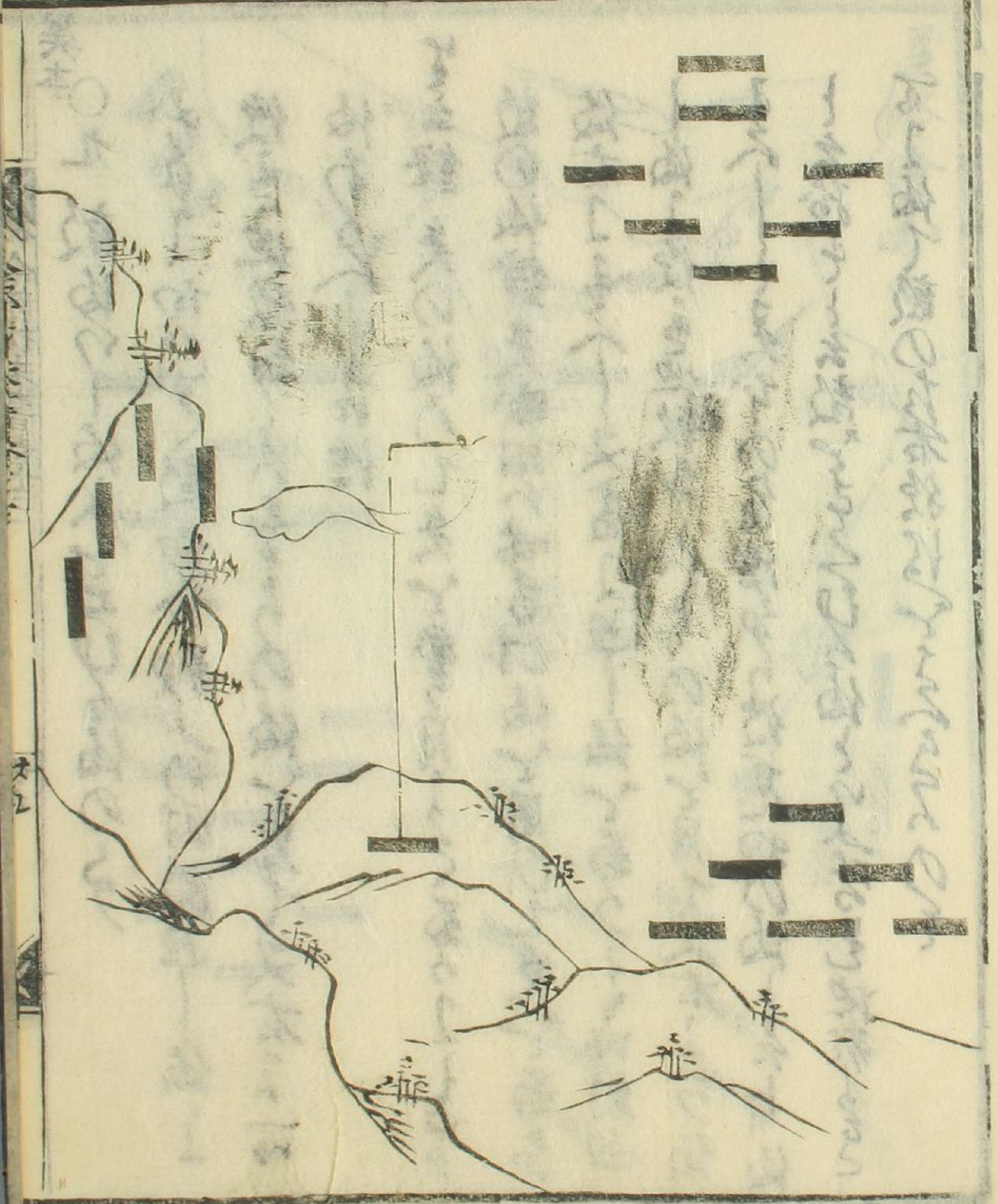


同

〇七 常蛇之備之事

孫子ガ云ク善ク用ル兵ヲ譬ハ如シ率然ノ率然ハ者常山ノ蛇也撃ツ其首ヲ則尾至リ撃ツ其尾ヲ則首至リ撃ツ其中ヲ則首尾俱ニ至ルト云々是亦方四八陣之理無異口傳

常蛇之備之圖

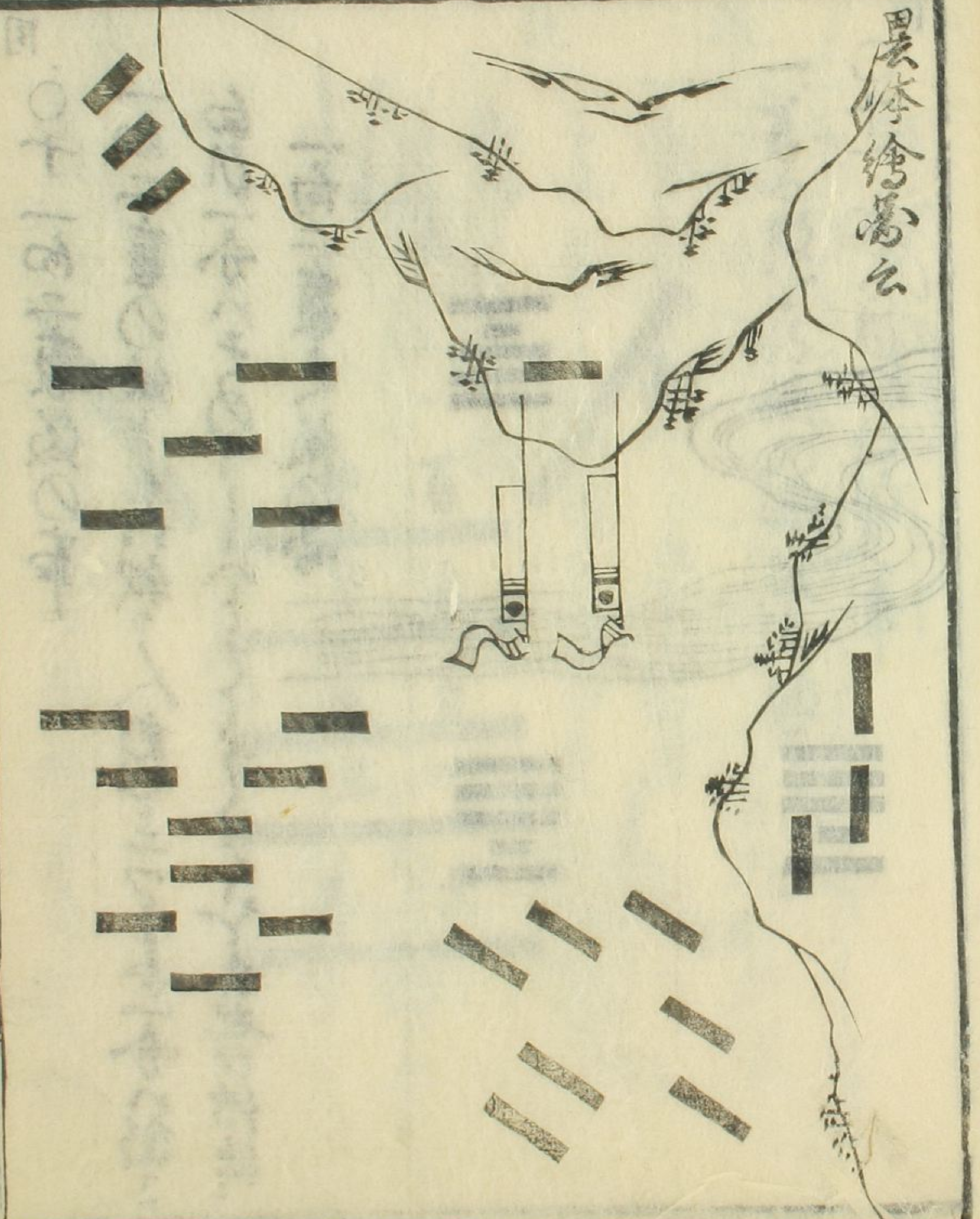


同

○八陣ノ備の事

巴ノ備と云ハ山手より付敵地へ働入の時をは後陣ハ殿軍の備を作伏兵となりて敵のおくれを撃ヲ云也 口傳

巴ノ備の圖



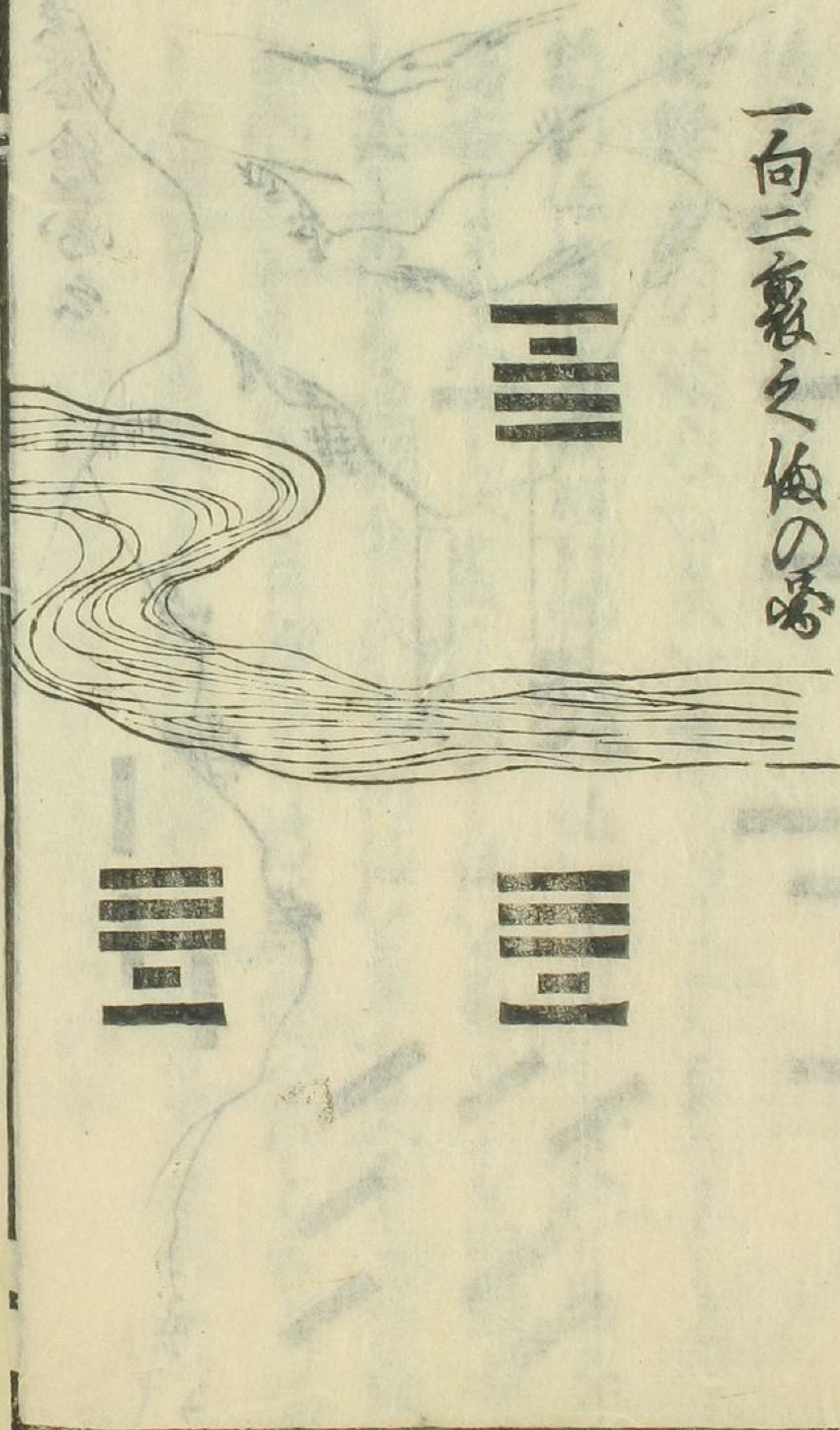

異本
○九　敵備へとむかふ備のこと
山ニ向ひて敵と合戦の時敵迎し備ニ
後ハ地形によりて右手の備を用て又右ニ一備
備ありへしに候
先云鉾矢の備乃乙矢を雲ノ月ニつく前ノニもつく
敵の備鉾矢賊附ハ味方ハ此備を用ひて乙矢を前ニ
備右ニ立へし又寄ニて迎し備を前ノニも敵迎
し備ニ後ハ地形ゟ偽トリの備を用て又右ニ一ツ備
立へしと是ハ其の旨趣ゟ備ニ又物の備と云トリ備
と云様ニと云敵をまちてむかふ備とい是地形ニよき
所ニ備て敵の左右を後へおさへるのを

同

○十一向二裏備の事

一向二裏の備と云ハ我ヵ人数を二ツにして一分ハ敵に向ひ一分ハそのうしろへとをくくを云也口伝有之

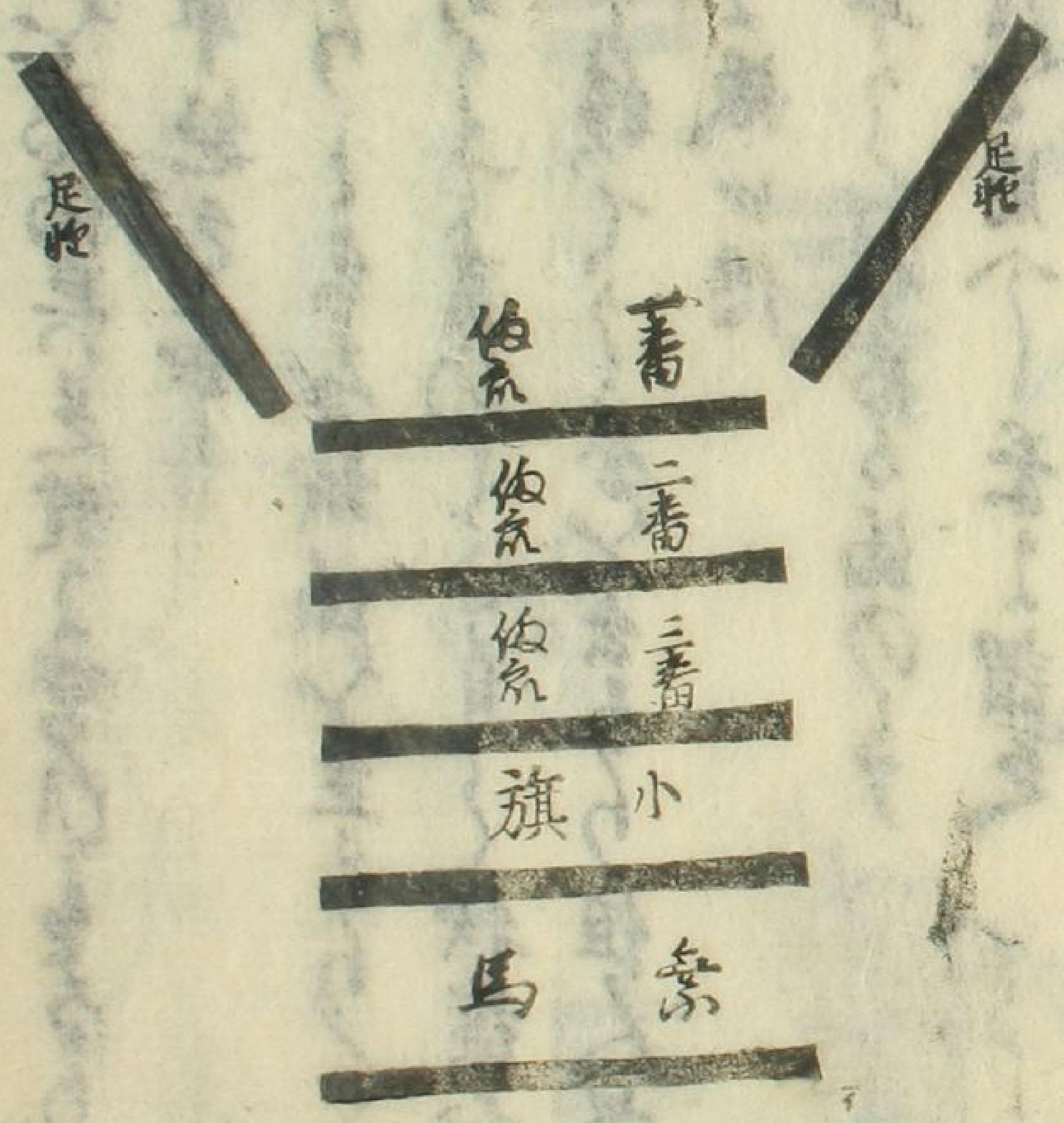
一向二裏之備の図



同

○十二 来る敵を待備之事

一来る敵を待備の図陣之備ともいふ



來る敵を待伏兵足軽にてかひとるなり口傳

奥本
○十二 車蛇之事

一車がかりと云は我備を立ならべ息ついで代

息りめぐりて其のたよりしく我旗本と前備

まはると積てかかると云なり但人数によりて

地形に依口傳

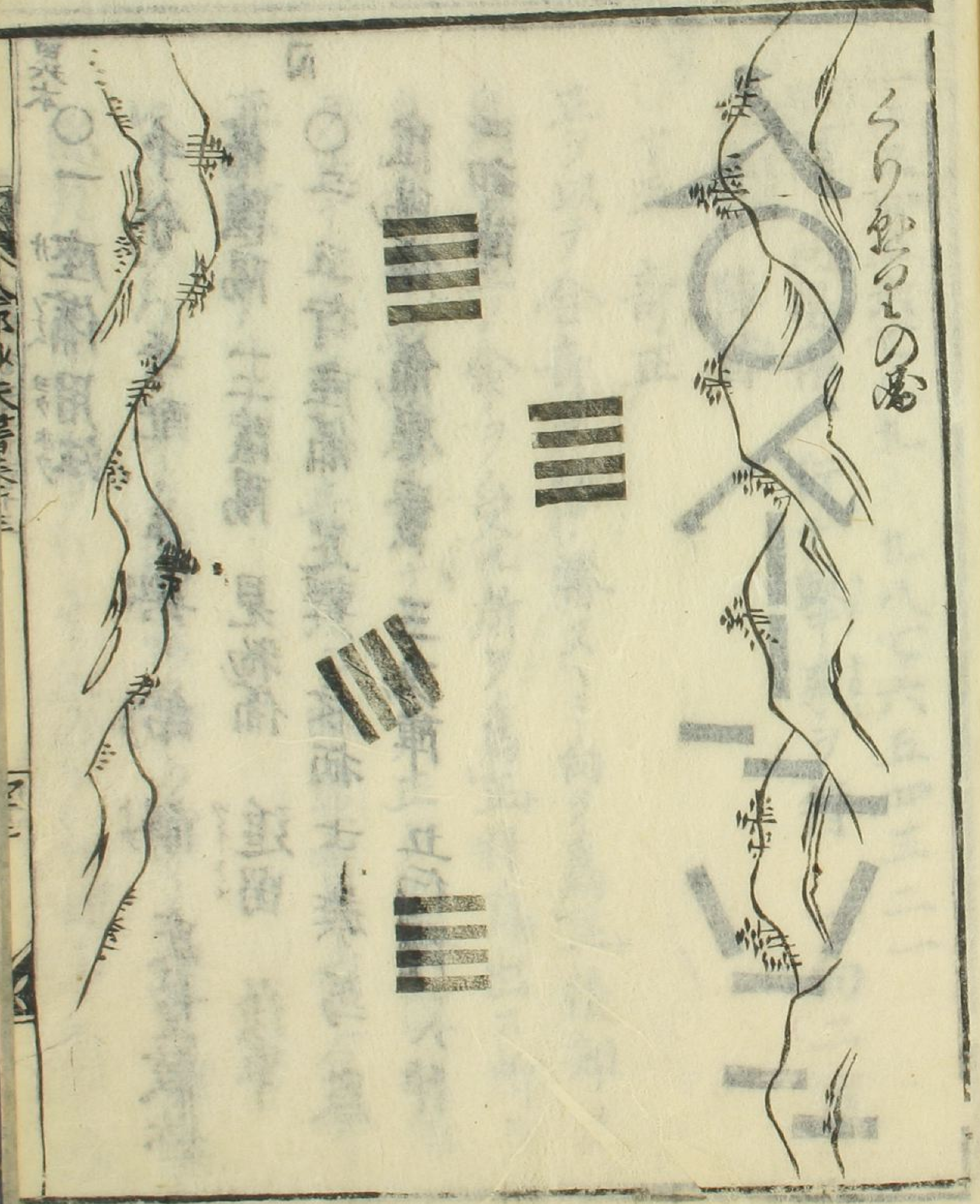
同
○十三 車がかりを著る備の事

一雲月を用べし第に謂之

同
○十四 備をまるくしてくりかかる備法之事

一手備ごとにてこそ懸るがとうくしまはしかかる也

陣営の備法のごとし



異本○一 座備用法

手分 手配 手與 結 解 度量數

備陰陽 一二陰陽 見物備 追留 後軍

同○二 五行座備 足輕 長柄 士 旗 馬 殿

陰陽備 備應變 三叉陣 五行陣 八陣

四却陣

一二三四五六七八九 九八七六五四三二一

回備 同留備 行テ撃来ヲ待 一向二裏

車懸 陣替

異本○十五 奇正

正ヲ以テ合奇ヲ以テノ勝スヘシ向ヲ爲正ト後却ヲ

爲奇ト主ノ命ヲ受ル所ヲ爲正ト將自ラ出ス所ヲ

爲奇ト敵我備ヲ奇ナリトセハ正ヲ以勝敵我備

ヲ正ナリトスレハ奇ヲ以テ勝虚實ハ我ニ有奇

正ハ敵ニアリ

生云いろくの名を設るといへども實ハ戦ハ

陳れ後立の三ありて三のうち地より利て戦

と薬縄なり一ツとハ二ハ放銃を洗ひ彼　ハ人
教の通りし是形也平場にてハ車懸山にて
も洗是又地形によりて形をなすれハ彼の形を
なれハいかにも彼へ随一なり

信玄全集末書下巻之十三